

今年も遅くなってごめんね、そのぶん読むところ多いから **特大号**

岡山細胞検査士会会報

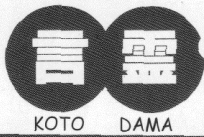
PACK



2005年度版

- ON MY MIND, TO YOUR MIND

2005年の



成らぬは人の為さぬなりけり

(上杉鷹山)



(写真: 中島弘一)

今、私たちの進むべき道は! ?

みんなで考えよう、これからの岡山細胞検査士会



前口上

恐るべし

化学式 $C_5H_4N_4O_3$ 。分子量168.11。比重1.89。

ここ10年来、職員検診を受けるたびに高尿酸値を指摘されてはいたのだった。が、人間、実際に痛い目を見ないことには身にしてみてもわからないものである。それが、いわゆる生活習慣病をはびこらせることになっていると、日々耳にしているも…。

発端は、左足くるぶし付近のわずかな関節痛らしきものであった。中学時代、ひどい捻挫をした経験があり、古傷の痛みと勝手に解釈していたが、夜も深まるにつれ痛みは増すばかり。ためしに立ち上がって左足にグッと体重をかけてみたところ、激痛が足の裏から脳天に突き抜けた。笑ってる場合じゃないが、あまりにも痛くて笑ってしまう。よく観察してみると足首から下に浮腫があり、少し熱感も伴っていて、赤っぽい。疼痛、発赤、浮腫、熱感と、教科書に書いてあるまんまの、じつにわかりやすい炎症症状が目の前に繰り広げられていたのであった。

翌朝。ベッドから這い出し、意を決して立ち上がってみる。痛みの主座する場所は土踏まずの上あたり、ちょうど足の中心部にでっかい「痛みの玉」を抱えたような感じである。多少我慢すれば、かかとのいちばん端っこの部分でどうにかこうにか体重を支えられそうだ。「ま、なんとかなるか…」と幾分のんきな構えで、しかしまた一方では腹の底に気合を込め、心の中で「せーのっ！」と一声叫んで、死んだ気になって出勤準備を開始した。死んだ気になって足を持ち上げ、死んだ気になってパジャマを脱ぐ。死んだ気になってジーンズを履き、死んだ気になって左足に靴下を履く。仕上げはスニーカーだ。一か八か、死んだ気になって左足をねじ込んだ。目が覚めてからというものの、うちを出るまで死んだ気になりっぱなし。「お前はもう死んでいる」とケンシロウに言われた悪人の気持ちを少し理解できた気がする朝であった。

左足を引きずりつつ、最寄の駅で電車に乗る。座席に座って40分、憩いのひとは瞬く間に過ぎて、電車は岡山駅のプラットホームへ。電車を降りてから職場まで、自転車に乗っての通勤であるが、自転車置き場までは歩かなければならない。健常時であれば、早足で5分ほどの距離が、この日に限っては果てしなく遠く感じられる。まずは駅の階段の上り下りがつらい。とくに下りでは足に衝撃を受けやすいため、ちょっと油断すると、息も止まりそうな激痛が襲ってくる。手すりにへばりつくようにして、なんとか改札口まではたどり着いた。改札を抜け、いよいよ外の世界へ。まるで初めての巣立ちに臨む小鳥のような心境である。歩道に手すりはない。頼れるのは痛みのない右足一本のみ。とはいえ、改札口までの道のりで、すでにふくらはぎあたりには、かなり張りがきている。「えーい、ままよ！」と、改札口を片足で跳ねるように飛び出した。

出勤を急ぐ人波が、次々に私を追い越してゆく。「昨日までは私もあちら側の人間だったのだ」、などと、ひとり勝手に疎外感をつのらせつつ歩く自転車置き場までの道。体感歩行速度は、時速0.7キロメートルといったところか。20分ほどかけて、ようやく自転車置き場まで到達した。

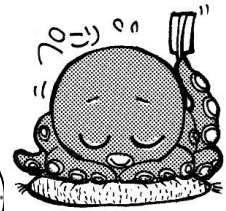
自転車がまたがってしまえばもうこちらのもの。信号機のタイミングを計りつつ、スピードを出したり緩めたり。微妙なさじ加減で地面に一度も足を触れることなく、なんとか職場に到着することができた。

職場に着くや、同僚に事情を説明し、さっそく外来受診。問診ならびに血液検査の結果から、尿酸値の異常以外にめぼしい所見が見当たらず、診断は「痛風発作」に決定した。ここから、私と痛風発作との長い戦いが幕を開けることになったのである。(つづく)

リレー

他個紹介

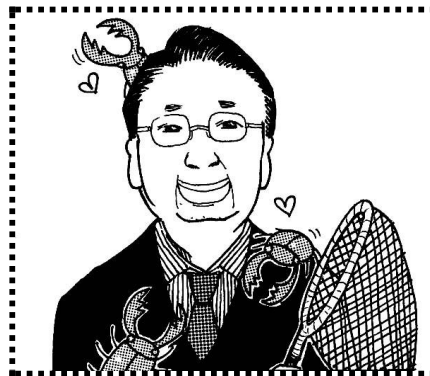
PART13



倉敷芸術科学大学 生命科学部 生命科学科 教授

加計学園 細胞病理学センター 所長

■大野英治先生



大野英治先生は倉敷芸術科学大学生命科学部生命科学科の教授及び加計学園細胞病理学センター所長として活躍されております。現在、私は大野先生のもと、助手として勤めさせていただいている訳ですが、そもそもは北里大学で自分が細胞診コースの学生だっ

た頃からお世話になっていました。

当時から大野先生はその豪快なお人柄と独特な講義の雰囲気、学生の間でも人気の先生の一人でした。研究室の研修旅行で阿蘇に行った夜は、私とクワガタ採集に繰り出すなど、そんな一面もお持ちです。今もその変わらぬ雰囲気と、ときに厳しい叱咤激励で、学生をはじめ我々教員もグイグイと引つ張っていただいております。

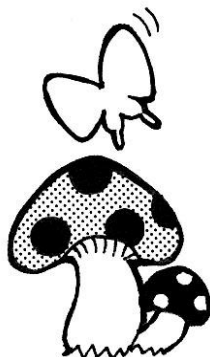
まだまだ未熟な自分ではありませんが、今後とも宜しくお願ひします。岡山県にはまだまだ昆虫なども沢山いそうな雰囲気があるので、またクワガタ狩りに行けるのを楽しみにしております。阿蘇での収穫はカナブンとゴキブリだけでしたから。

紹介者：宮本朋幸
《「本人のコメント」》

気が付いたらいつの間にか北里大学時代の仲間が集まり、わいわいやっているという今日

この頃です。北里大学細胞検査士コース卒業生は、宮本朋幸先生はじめ、先生の2年後輩の大学院生修士2年生・守本容子君、1年生・織田智博君がおり、さらに本年4月から大学院生として入る予定です。また岡大医学部保健学科には宮本先生の3年先輩の佐藤妃映先生が助手として活躍しています。

宮本君には臨床細胞学発展のため大いに期待しています。



■宮本朋幸さん



私にとって宮本さんは大学時代においては先輩であり、今は先生です。

そんな宮本さんとのはじめの出会いは大学時代の細胞診実習でした。その時の宮本さんは、髑髏の指輪とピアスという出で立ちであり、学生の私にとっては「やばい院生」という印象でした。

次にお世話になったのは、細胞診コースに入ってからでした。

その時は前回同様の出で立ちに加え、ソフトモヒカンで白いカラーコンタクトという様相でした。しかし、話してみるとその外見に反して、意外とやさしく、「自分をしっかりもっている人」という印象に変わりました。

さらに印象が変わったのが、私が大学院に入ってからでした。実験の基礎手技、発表の仕方に加え、社会人としてのありかたを細部にいたるまで面倒見ていただき、また困ったことがあると、親身になって相談にのつてもらっています。音楽(特にパンク)も好きな宮本さん、今後も迷惑をかけ続けるつもりですが、よろしく願います。

紹介者：織田智博

《本人のコメント》

織田に出会った当時、自分では「やばい院生」という自覚は全く無かったのですが、改めて人から云われてみるとそんな気もします。今ではすっかり落ち着いたので宜しくお願

いします。

■織田智博さん



聞きませんが、見ているほうが気持ち悪くなるくらいよく食べます。
真冬であつても常に半そでTシャツを着用するなど異常なことをやっている彼ですが、勉強や研究に関しては非常に熱心で、遅くまで学校に残り実験などを行うといった真面目な面も持っています。

研究室のなかでは一番の下つ端で、みんなからかわいがられると共にこき使われている織田くん、これからも頑張ってください。

紹介者：守本容子

《本人のコメント》

岡山に来た理由は守本政権を失脚させること、三宅先生の糖尿病を管理することだったので、今では、二人からパシリにされています。こんなはずでは無かったのですが……。

倉敷芸術科学大学の修士課程1年生の織田智博くんの紹介をします。織田くんは去年の3月に北里大学を優秀な成績で卒業し、実家が関東圏にあるにもかかわらず、遠くこの岡山県までやって来てしまつた少し変わった人です。北里大学時代にはハンドボール部に所属していたスポーツマンの織田くんは非常によく食べ、よく飲みます。「気持ちいいほどよく食べる」といったことは良く

■ 守本容子さん



守本容子さんは北里大学衛生学部細胞診コースを卒業し、できたばかりの倉敷芸術科学

倉敷芸術科学大学のご紹介

三宅康之

倉敷芸術科学大学には、芸術学部、産業科学技術学部、生命科学部があり、芸術と科学のミックスした全国的にもユニークな大学です。其中で我々の所属している生命科学科は生命科学部の中にあります。

生命科学部には他に健康科学科、平成18年度からは生命動物学科が開設されます。生命科学科定員は110名で、1年次は全員基礎教育と一部の専門科目を取ります。2年次以上がるときに成績と希望によって医療コース、生命化学コース、生命環境コースに分かれます。約8割の学生が医療コースを希望しているのが現状です。

医療コースには臨床検査技師+細胞検査士コース(44名)と臨床工学技士コース(10名)があります。臨床工学技士コースは現在4年生になって提携校である神戸の神戸総合医療介護福祉専門学校か、東京の帝京医学技術専門学校に行きます。卒業は当大学4年卒と専門学校卒の2つ取れます。これもユニークな特色の一つです。臨床検査技師+細胞検査士コースでは4年次に臨床検査技師のみ(約30名)と臨床検査技師+細胞検査士コース(約15名)のダブルの免許が取れる2つに分かれます。これも希望と成績によって分かれます。3年次に細胞検査士コースを希望する人は約8割ですが、現実にはダブル免許を取るのには難しいのでセレクトするしかありません。良いことなのかどうかは定かではありませんが、学生は良く勉強します。

施設面では専門の鏡検室や、生理機能検査室などを持っているのが特徴です。細胞診コースのための教室はもちろん別個にあります。プラズマテレビや10人鏡などもあり、施設は充実しています。機会がありましたら、ぜひ見学においてください。

大学の大学院に入学され、細胞病理学研究室にて修士論文を作成されました。医療コースの卒業生すら出ていないところに來ること自体が非常に勇氣ある行動と言うか、大胆で竹を割ったような性格が簡単に想像できると思われます。

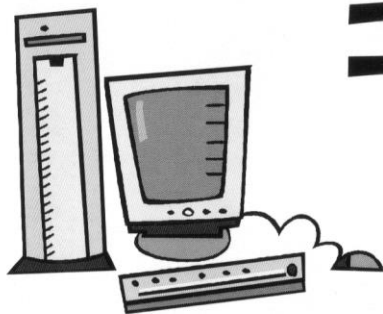
当大学の大学院生は、23号館4階に活動拠点を置いています。現在2名の大学院生(織田、岡田)を従え守本組を作っています。外へ出れば舎弟が十人以上いるだろうというわさが大学の中を駆け巡っています。性格はがんばり屋サングで、こつこつ積み重ねて物事

を行うタイプです。服装はポールスミスとバーバリーをよくなく愛する現代少女です。主食はスイカとお菓子との噂もあります(真実です)。この4月より尾道市民病院に就職します。岡山の方とも学会、勉強会等で今後も会う機会は多いと思います。まず、舎弟になるとことをお勧めします。損はありませんが、得になることでもあります。

紹介者・三宅康之
《本人のコメント》
丁寧な紹介ありがとうございました。否定しておきたい箇所も多々ありますが、全体像

としては合っている気がするのを否定できません。私は今年の春に大学院を卒業して尾道に帰りますが、夏にはスイカをお土産にして大学を訪ねるので楽しみにして下さい。それでは今後ともよろしくお願ひ致します。





コンピュータ・

ハンダーランド

Vol.
8

プログラマーを
大切に!



CPUの性能向上は足踏み状態で、HDDはどんどん大容量化、低価格化が進んでいる中、みなさんいかがお過ごしでしょう。プリンタの呪縛からやっと解放されたにもかかわらずインク代の高さから印字を渋っている自称パソコンオタクKです。今回は真面目(?)に病理システムの話をしたと思います。実はここだけの話ですが、私、倉敷にある某大学病院の病理部のシステムを作ってきました。システムというのはプログラムのことですが、世間で使われているプログラム言語(BASICやC言語など)ではなく、市販データベースの簡易言語を利用したものです。それでもソースコード15000行、構成ファイル数500以上の巨大なシステムです。16台のPCを部内LANで接続し、病院LANとはゲートウェイ(関所PC)経由で患者属性(名前や生年月日など)を取り込めるようにした本格的なシステムです。ちなみにソースコード15000行というのは1ページ40行で印字しても375ページで、ちょっとした本になるくらいプログラムが膨大と解釈して下さい。自分で言うのは恥ずかしいのですが、ここまで自主開発している施設

はさすがに無く、かゆいところに手が届くような良いシステム、と誰の断りもなく勝手に思っているのですが、動くのが当たり前と思っている使用者からは一ほめられても、100ぐらいけなされてしまいます。ま、どこでもプログラマの扱いというのはこんなものでしょう。

ところでこのシステム、メーカー製病理システムが買えるまでのつなぎとして開発したもので、病院のオーダリングに接続したり、一人で長期間保守したりするにはちょっと無理があります。病院側にはずいぶん前からシステム購入をお願いしていたのですが、すぐには買ってもらえません。と言うのも価格が高すぎるからです。みなさんが普段使っているMicrosoft Office 5万円程度なのに対して、病理システムは数百万から数千万円とべらぼうに高いのです。これで幾ら儲かるの? と聞かれても返事ができるはずがありません。あらん限りの言葉を使って必要性を説くしか方法は無いようです。例えば、臨床からいつでも結果が見えて便利とか、バーコードで検体取り違いが抑止できる…とか。

ではなぜシステムは高いのでしょうか？内訳の大半は、プログラム開発や導入にかかる人件費です。みなさんが（自分も含めて）高いと思っているPC本体（端末）は、システムの中ではおまけ的存在にしか過ぎません。以前のシステム関連の論文では、マシンスペックが詳細に記述されていましたが、最近ではWindows PC 10台といった簡略な表記しかされないことを見ても納得できます。ですから、プログラムが少しでも書ける人がいたら、とてとても大事にして下さい。肩を揉むとか、PCを与

えるとか、給料を上げるとか、銅像を立てるとか、○△×とか、□◎☆とか（伏せ字部には思いつく限りの贅沢を好きなだけ入れてお楽しみ下さい。おっと、それは子供も見ていますからチョットやばいのでは…）。そうすれば、メーカー製が買えなくてもそれなりにデータをPCに残すことができます。大切なのは「システムが無いのでできない」のではなく、「ワープロでもいいからとにかく残す！」といった心意気でしょう。そうすれば輝かしい未来が…、来るといいですね。

ここで一言。「恵まれないプログラマにあいの手を！」

ヨオ～オ！

そりゃ合いの手だ！！

…と、バカなこと言っているうちに病院サイドから購入の打診があり、導入に向けてのワーキンググループの立ち上げ、オーダリングとの接続形態や運営方法、メーカーの選定などを協議し、幾多の困難を乗り越えてやっと購入にこ

ぎ着けました。ここまでの話は涙無くしては語れないのですが、編集長からの催促が怖いので、この話は酒の席でゆっくり…。あ！そういえば今日は車なので飲めなかった（*注）。ごめんなさーい、ではまたいずれ。

おっと、もうこんな時間だ。質問コーナーまだ大丈夫かな～。

質問コーナー

Q 1・1テラバイトのハードって何？

A 1・1兆（10の12乗）バイトまたは約1兆995億（2の40乗）バイトのハードディスクのこと。

A 2・正月は1寺バイトより2神社掛け持ちバイトの方がもっとハードです。

それでは、新型インフルエンザに気を付けて、またお会いしましょう。

次回予告「実録・病理システム導入編～その光と陰～」

なんじゃそりゃ！

*編集者注・Kは酒が全く飲めないのを車のせいにして飲み会からいつも逃げています。

●謎の男Kへの連絡は、小林博久 まで。

■ 知っていれば役立つ細胞所見

知っていれば役立つ！細胞所見ワンポイント講座⑥

《細胞外に形成されるライトグリーン好染性物質の由来と診断的意義に関して》 - 乳腺 -

collagenous spherulosis の報告年齢は 32～63 歳で、乳管過形成や乳管内乳頭腫で乳管上皮細胞や筋上皮細胞の増殖に伴い、乳腺末梢腺管から腺房にかけての管腔内に形成される篩状構造を呈した病変である。腫瘤を形成することなく、他の疾患の随伴所見として偶発的に発見されることが多い。この病変に遭遇する頻度は非常に稀で、その発生頻度は 0.17%～0.64%と報告されている。また、乳腺穿刺細胞診での collagenous spherulosis の報告が稀な理由として、病変が限られた末梢の管腔内に存在するため穿刺吸引細胞診材料で診断できるだけの細胞採取が困難なこと、副所見であるために細胞学的に認識不足であること、穿刺吸引細胞診材料では乳管上皮細胞に埋もれ spherulosis が発見できにくい、などが考えられる。

球状物質は 20～130 μm 大、エオジン好染性で、線維状や間質性の粘液物質から構成され、上皮細胞や筋上皮細胞に取り囲まれている。collagenous spherulosis は多くの膠原繊維からなり、PAS 反応陽性、免疫組織化学的には type III 型ならびに IV 型の膠原繊維とラミニンなどの基底膜構成物質であり、Weigert の弾性線維染色で黒色に染色される弾性線維や酸性粘液を含む³⁾。

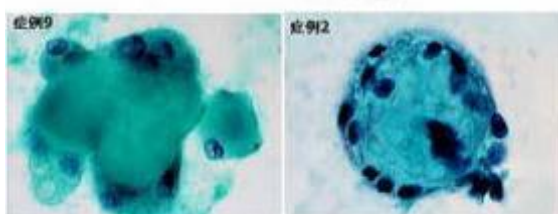
これに対して、球状物質が粘液物質のみで構成されるものを Tavassoli らは mucinous spherulosis と表現し、硝子化した膠原繊維様物質で形成される球状物質の collagenous spherulosis とは区別している。このような球状物質は 60～130 μm 大のやや大型の球状構造のとして観察される。

これら両者の違い（球状集塊の中心部分を形成する間質様構造物の形態的变化）は、それを構成する type III 型ならびに IV 型の collagen とラミニンなど基底膜構成物質の線維状タンパクの量に由来する形態的なあるいは染色性の差として認められるものと考えられる。また、collagenous spherulosis は同心円状構造を呈し、辺縁がエオジン好性の厚手の被膜で取り囲まれ、中心部が疎なものや、星状の構造物を有するなど、多彩性が認められる。この球状物を取り囲む細胞は、電子顕微鏡的、免疫組織学的に筋上皮細胞由来であり、球状物は筋上皮細胞により形成されるプロテオグリカンないし基底膜物質から成ると考えられる。

Mucinous spherulosis ならびに collagenous spherulosis と鑑別を要する最も重要な疾患は、腺様嚢胞癌である。組織学的に collagenous spherulosis の球状構造物や腺様嚢胞癌のエオジン好性の円柱状物質は基底膜物質で構成され、形態学的には非常に類似している。腺様嚢胞癌で見られる偽腺管内の物質は①hyaline bodies、②mucoid secretion、③granular eosinophilic material の 3 型に分類され、hyaline bodies は collagenous spherulosis に、②③は mucinous spherulosis に類似した構造を呈し、腺様嚢胞癌にみられる粘液球との鑑別が困難である。これらの構造物は PAS 反応、alcian blue 陽性の粘液様

パパンニコロウ染色での球状物質分類

II 型球状体



球状物質は、パパンニコロウ染色の染色性ならびに形状により分類
I 型: 20～60 μm 大、ライトグリーン好染性の硝子様物質で構成
II 型: 40～100 μm 大、淡青色性の粘液様物質で構成

物質で構成され、両者を区別することは困難である。しかし、組織学的に腺様嚢胞癌は浸潤性の発育形態を示すのに対して、mucinous spherulosis ならびに collagenous spherulosis は管内病変として偶発的に認められる点が大きく異なるところである。

細胞診的にも、腺様嚢胞癌の特徴的な所見の一つである粘液球と mucinous spherulosis ならびに collagenous spherulosis で認められる球状構造物は、非常に類似している。しかし mucinous spherulosis ならびに collagenous spherulosis は、ボール状の球形を呈するのに対して、腺様嚢胞癌の粘液球は球状構造の一部に周囲間質との移行を認め、風船に空気を入れたような突出した部分が認められる。また、典型的な腺様嚢胞癌の穿刺吸引細胞像では、粘液球と密度の高い三次元的な細胞集塊や散在性に出現する上皮細胞が collagenous spherulosis との鑑別になると報告されている。

大型の球状物として観察され鑑別を要するものの一つとして myspherulosis がある。

Myospherulosis は、1969 年にケニアから背部筋肉内の結節性嚢胞状病変 7 例が報告された。その後、乳腺穿刺吸引細胞診でも 1984 年に報告されている。

Myospherulosis はパパニコロウ染色では赤色に染色され、表面平坦な球状集塊として認められる。また myspherulosis は大小の嚢胞状球状構造 parent cyst の中に多数の小型球の endobody が充満している。これに対して mucinous spherulosis 及び collagenous spherulosis は比較的均一な硝子様のものや無構造物質ならびに間質性の粘液様物質で、これらの球状構造物の表面に紡錘形の核を有する筋上皮細胞が認められる点が異なる。

乳腺穿刺吸引細胞診でライトグリーン好染性の 20~130 μ m 大の球状物質が認められたときには mucinous spherulosis ならびに collagenous spherulosis と腺様嚢胞癌を鑑別に入れ検索する必要があることを痛感した。中心部が硝子様物質よりなる collagenous spherulosis に対して、球状物質が粘液物質のみで構成される mucinous spherulosis は特に腺様嚢胞癌の粘液球との鑑別が非常に困難であった。しかし、20 μ ~60 μ m 大の硝子化した球状物質を含む collagenous spherulosis と共に出現した場合には、collagenous spherulosis の垂型である mucinous spherulosis の可能性を念頭に入れ、臨床所見を含めた慎重な検索が肝要である。

(川崎医科大学附属病院病院病理部 畠 榮)

【文献】

- 1) Clement PB, Young RH, Azzopardi JG: Collagenous spherulosis of the breast. *Am J Surg Pathol* 1987; 11:411-417
- 2) Grignon DJ, Ro Jy, Mackay BN, Ordonez NG, Ayala AG: Collagenous spherulosis of the breast: Immunohistochemical and ultrastructural studies. *Am J Clin Pathol* 91:386-392, 1989
- 3) Wells CA, Wells CW, Yeomans P, Vina M, Jordan S, d'Ardenne AI: Spherical connective tissue inclusions in epithelial hyperplasia of the breast ("Collagenous spherulosis"). *J Clin Pathol* 43:905-908, 1990
- 4) Tavassoli FA Second edition Pathology of the breast McGraw-Hill New York 1999
- 5) Johnson TL, Kini SR: Cytologic features of Collagenous spherulosis of the breast. *Diagn Cytopathol* 1991; 7:417-419
- 6) Tyler X, Coghill SB: Fine needle aspiration cytology of collagenous spherulosis of the breast. *Cytopathology*. 1991; 2: 159-162
- 7) Perez JS; Guillermo MP; Bernal AB; Bermejo MR. Diagnosis of collagenous spherulosis of the breast by fine needle aspiration cytology. A report of two cases. *Acta Cytol.* 1993; 37: 725-728
- 8) Ferrell LG. Myospherulosis of the breast: Diagnosis by fine needle aspiration. *Acta Cytol* 1984; 28:726-728
- 9) McClatchie S, Warambo MW, Bremner AD. Myospherulosis: a previously unreported disease? *Am J Clin Pathol.* 1969 Jun;51(6):699-704.

■初心者クライマーの運命やいかに！？

山は怖い、けれど山はすばらしい！

双六体験記

SUGOROKU TAIKENKI

登り続ける細胞検査士

中島弘一(新婚4ヶ月)



天然岩魚が僕を呼ぶ

今、トレッキングが流行っているらしい。車やロープウェイで、日帰りで手軽に山登りができるようになったせいもあるのかもしれない。僕もアウトドアが大好きである。釣りが趣味のため、釣りの後によくキャンプをしたりする。しかしこれまで、トレッキングやちゃんとした登山をやったことはなかった。周りの友達に山好きの人もいなかったため「チャンスがあったらやってもいいかなあ」くらいにしか考えていなかった。そんな折り返りも折り返り、上司の知り合いで山好きの婦人科の先生にお会いする機会があり、僕がアウトドア好きなことをお話すると、「今度、一緒に登ろう！」という話になったのだった。もちろん、このときは社交辞令にしか感じていなかったし、まさか本当に登るとは思ってもいない。「ちゃんとした山登りは大変そうだしな…」とも感じていたからである。ある年の春の臨床細胞学会で、またその先

生にお会いすることができた。先生の話だと、この夏に山に登るといふ。先生は山小屋にある診療所のスタッフとして行かれるらしい。「もし一緒に行くとしたら、ある程度お手伝いはあるかもしれないが、自由にしていいていい」とのこと。それでも僕は迷っていた。「体力に自身がないしなあ」などと軟弱な気持ちいっぱいだったのだ。しかし（！！）、先生のある一言で僕は山へ登る決心をすることになった。先生いわく、「中島君は溪流釣りが好きだったよね。黒部川の源流が近くにあるから、岩魚が釣りに行けるよ。あまり人が行かないから入れ食いだよ」

「天然の岩魚が！？入れ食い！？マジっすか！？」この瞬間、僕の心の迷いは消えうせた。「先生、一緒に行きます。よろしくお願ひします！」とまあそんなわけで、僕のはじめての登山が決定した。

いざ行かん双六診療所

いろいろ先生と日程の調整等をしているうちに、参加メンバーも固まった。まず、リーダーであるS先生（♂）一家（奥さんと中学生のようくん、小学生高学年のあさちゃん、末っ子のゆうくん）と某大学医学部山岳部のOさん（♂）、看護師のTさん（♀）、そして僕の友人のI先生（♀）、後輩のMさん（♀）、そして僕と、総勢10名の大所帯。日程は3泊4日。登山前日にS先生宅に泊めていただき、そこから出発となった。

登山当日は曇り時々小雨。山登りにはピーカンよりよっぽど登りやすい気候らしい。ペースメーカーは末っ子のゆうくん。確か5歳くらい。荷物こそ自分で背負っていないが、彼のペースならついていけるかな、とちょっと安心した。僕たちの荷物は自分の着替え、カメラ、おやつ（登山ではかなり重要）、飲み物、山小屋で飲むお酒とつまみを少々、そして大事な釣り道具。だいたい7～8kgくらいだと思う。これでも重いなあと感じていたのだが、山岳部のOさんは診療所で使用するためのO2ボンベをザックに入れている。その他に三脚、カメラまでも。試しに背負わせてもらったが、シャレにならない重さだった。恐るべし、山岳部…。

いよいよ、登山開始。みんな最初はしゃべりながら楽しく登っていたのだが、1時間もすると黙々と歩いている。息もあがってくるし、きつくなってきた。予定の時間では約3時間で鏡平小屋に到着。お昼を食べてからさらに登ること約3時間で、目的地である双六小屋に到着予定。しかし、つらいなあと思いながらも景色を楽しみつつみ

んなでがんばり、予定通りに双六小屋に到着した。双六小屋は標高約2600mの場所にあり、8月でも夕方になると寒いくらいだ。

早速、小屋のスタッフに挨拶をすませ、診療所兼僕たちの住みかに荷物を降ろすことができた。あー、がんばった、がんばった。診療所は玄関兼荷物置き場があり、その奥に診察室、そしてその隣が台所と6畳の部屋となっている。水道は付いているが雪どけ水をろ過して使用しているため、水はとても貴重な物である。無駄遣いに注意し使用は最小限にする。また、食事は自炊である。洗い物の洗剤も自然に配慮しあまり使用しないようにしていた。電気も付いているのだが21時には完全に消えてしまう。これも山では発電機を使用しているため燃料の節約のためである。みんな、早く起き出して登山に向かうのでそんなに必要ないのかもしれない。診療所では患者さんがいつ来てもいいように大型のバッテリーを装備しているため、非常時に電気の使用は可能であった。



山の診療所

そうそう、診療所の紹介を忘れていた。双六小屋にある診療所は、富山県にある某大学医学部の山岳部とそのOB達のボランティア団体で成り立っている。医療器具や薬品等も寄付と診療費でまかなっている。総ての治療に対応ができるわけ

ではないが、最低限の治療はできるようになっている。しかし、どうしても緊急事態にはヘリコプターの出動を要請することとなる。なるべく呼ばずにすむに越したことはない。皆さんも「診療所があるからどうにかなるだろう」ではなく、もし

もの時の診療所だと思い、体調を万全にして、なるべくお世話にならないようにしてほしいものである。

診療所2日目は隣の三俣山荘にある診療所へご挨拶に行った。ここは確か岡山大学医学部が守っている診療所だったような気がした(岡山の会報なのにいいかげんですみません)。片道四時間程度の行程。双六山山頂に寄り道をしながら向かった。あいにく、天気は曇りで景色はあまりよく見えなかったが、それでも時折見える風景はまさに絶景である。来て良かったなあと思う一瞬。そして三俣山荘に到着するとS先生から「この小屋の下のほうに黒部川の源流があるからね。ほとんど一本道で迷わないと思うから良く覚えておいてね」とのお言葉。「おおっ」と、明日の釣りにむけて気合が入る。

三俣山荘の診療所では最近の様子や患者さんの人数、またお互いの小屋で多い薬や少ない薬の情報交換をおこなった。しかし、山の話も聞けてとても楽しいひと時だった。診療所に戻ると夕食をとりつつ明日の予定の確認。最低限のスタッフを残しみんなは槍ヶ岳へ。槍ヶ岳は3180mもある日本で五番目に高い山である。ちょっとそち

らも行きたいかも、と思ったが、岩魚たちの誘惑には勝てず、一人で釣りに行くことにした。一人で行くにあたりS先生から注意があった。「無理はしないこと。16時30分までには帰ってくる。もし帰れないようであれば三俣山荘に泊まること。あまり川を下らないこと。」この約束は守ってほしいと言われたので「絶対に守ります」と答え、お許しをいただいた。黒部源流までの行程は約3時間半。出発は6時・・・逆算すると釣りができるのは3時間程度、このとき僕はフライ・フィッシングで釣りをするつもりだったのだが、本格的な溪流で釣るのは初めてである。こんな短時間で釣れるかなあと少々弱気になってしまった。



源流目指して

診療所3日目、いよいよ釣りである。お弁当におにぎりを作ってもらい。おやつをザックにいれ、後は大切な釣り道具。出発間際にOさんがポカリスウェットの粉末を2袋渡してくれた。「中島さん、もし川で怪我をしたら無理に動かないでいてくださいね。明日絶対に助けに行きます。川だから水はたくさんあるのでこれを溶かして飲んでください。おやつもいっぺんに食べちゃだめですよ。」この言葉でとても不安になってしまったのだが、まさかここまで来て「本当に大丈夫でしょうか？」と聞くのも悲しいので、「ありがとうございます、気をつけますね」と笑顔で答えた。…内心「マジかよ〜」。

道は昨日の道のりなので、ほとんど迷うことなく三俣山荘付近まで行くことができた。あとはもう少し下るだけだ。天気もこの時点では曇り時々晴れ、まずまずのお天気。さらに下りて行くと沢の音がしてきた。やはり水の音を聞くと「来てよかったなあ」と釣りもしていないのに感動してしまった。小さな沢をいくつか越えて黒部川の源流に到着。ほぼ予定時間通りだ。沢のさらに上部はまだ雪渓に包まれていて、雪の中から水が流れている雰囲気である。川幅は2~3mでそれほど大きくはない。岩がゴツゴツしているので岩にさえ気をつければ危険な様子もなく少し安心した。

仕掛けを準備し、いざ釣りへ。フライ・フィッシングは、簡単に言えばフライと呼ばれる虫に

見せかけた毛ばりで魚を釣る。フライを投げ流れに乗せる。このフライを流しながら魚が水面のフライに食いつくところを釣り上げる。釣れるまで場所を変えフライを変え、がんばるのである。しばらく釣ってみたが釣れないので、おにぎりを食べ休憩した。ちょっと天気も悪くなり、小雨&霧がたまに出ようになってきた。魚はフライを見に来るのだけれどもなかなか喰えてくれない。何が悪いのかしら…。場所を変えつつが頑張ってフライを投げ続けた。そして、タイムリミットあと1時間くらいになり、やっと1匹、釣り上げに成

不吉な前兆

帰りは本格的な雨になってしまった。体は冷えるし、道は悪いし、視界も悪くひたすら最悪な状態である。帰り始めから雨が強くなり、道は川のようになっている。注意して登っていたつもりなのだが足をとられて滑ってしまった。『ガツッ！』転びはしなかったが、右足の親指を岩に強打してしまった。あまりの痛さにうずくまる。靴を脱いでどのような傷になってしまったか確認したいが、ずぶ濡れの状態で靴を脱いでしまうと、もう一度きちんと履くことができないと思い、我慢して先を急ぐことにした。雨で視界が悪く、こんなときに限って周りにはほかの登山者もいない。とても心細い気持ちになる。行くときにはなんでもない道だったのに、あちこちに滝ができていてビックリする場所が何箇所もあった。「無事に帰れなかったらどうしよう…」という考えが頭にチラついたが、とにかく歩くことに集中である。この後はただただ本能的に歩いていたような気

戦慄の体温計

僕は麻雀を始めるとすぐに気持ち悪くなってしまい、嘔吐してしまった。明日は下山日のため、体調を早めに復活させないといけないと思い、S先生に報告した。「あまりしゃべらないからどうしたのかと思っていたよ。まず、熱を計ってみな」といわれ、電子体温計で熱を計ってみた。ピピッ

功。体長15cmくらいのチビ岩魚だった。かわいそうなことに僕の合わせが遅かったため針を飲み込まれてしまった。本当であればキャッチ・アンド・リリースするのだが、息も絶え絶えになってしまったため、持ち帰って頂くことにした。この後も残り時間めいっぱいがんばったが、これ以上釣ることができなかった。確か、この登山に誘われたきっかけは「岩魚が入れ食い」だったのでは…。まあ、とても雄大な景色の中釣ができたし、初心者僕が1匹でも釣れればたいしたものなのかもしれないけど。

がする。山小屋が見えたときの安心感と疲労感は何んともいえない気分だった。

小屋に到着して早速ぶつけた足の親指を見ることにした。爪全体が血豆になっており、もうビックリである。S先生に診てもらおうと「2～3週間もすると、全部爪が剥がれるかもね」と言われてしまった。まあ、見た目は派手だが痛みはそれほどではなかったので安心できた。実際に2週間ほどで爪が剥がれたのだが、そのような足の親指を初めて見たので、かなりビックリであった。

診療所4日目。今日は昨日の疲れを取るために、特に予定は入れずのんびりするつもりだ。今まで重症の患者さんもなく平和な日々を過ごしてきた。S先生の「麻雀をやろう」というお誘いで麻雀をすることに。この他にもUNOや将棋、トランプに人生ゲームなど、遊び道具は天気が悪く山小屋に閉じ込められた時用にたくさんある。

ピピッと1分が経ち見てみると、な！なんと！39.2℃！！この結果を聞いてみんなで大騒ぎになってしまった。とりあえず、風邪薬と解熱剤（座薬）を投与してもらい寝ることにした。座薬をもらったときに「自分で入れられます」と反射的に答えたら「誰に入れてもらうつもりなのだ、

バカモン」と笑われてしまった。診察室で一人寝ていると隣の部屋から声が聞える…「なんだ〜メンツがいなくて麻雀ができないなあ」との声。…みんな、ごめんなさい、と心の中で呟いてしまった。

1時間程うたた寝をした後、また熱を計ることに。なんとなく気分も良くなったし、少しボーッとすれば大丈夫なような感じである。明日までにはどうにかしなければいけないし、気合でがんばろうと思っているうちに体温計がピピッと僕を呼んだ。期待とはうらはらに、なんとまだ39℃!!! 先生達も「なんでだ!？」と、またまた大騒ぎになってしまった。さっきまでの気合が39℃の数字を見たときたん吹き飛んで、病人に逆戻りしてしまった。みんなで順番に僕のおでこに手を当てて熱の様子を診てくれる。そんな中、後輩のMさんだけが「あまり熱っぽく感じないんですけど、本当に熱がありますか?」と言ってくれた。念のため、予備の電子体温計で計りなおしたが数字は同じ39℃だった。さらに座薬を入れ、またベットに戻った。隣の部屋からは明日の下山の作戦会議をしている様子である。「どうなってしまうのだろう」と思いながら、薬のおかげでまた夢の中に突入してしまった。

3度目の検温。先生達もこれだけ座薬を入れれば熱は下がっているだろうという雰囲気だ。僕も、大丈夫だろうと思っていた。今度こそは…ピピッ…体温計が呼んでいる。38.5℃!? 僕は「少し下がりましたね」と笑いながら言ったのだが、S先生は「こんなのは誤差内で下がったうちにはならない!」と真面目に答えられてしまった。Dr. 2名、看護師1名、医学部学生1名のスタッフみんなでいろいろ原因等を考えてくれている。きっとこんなにたくさんの医療従事者に看てもらえるなんて入院でもしなければできない経験だと思う。ありがたや、ありがたや。みんな、ありがとう。そして、とうとう点滴の登場である。山小屋の診療所では、点滴は非常に貴重なもので

ある。それに僕はスタッフということもあり、使用期限切れの輸液セットのチューブ、使用期限ぎりぎりの抗生物質と輸液を使うことになった。普通の生活をしていてもなかなか点滴をする機会など無いのに、高度2600mの山の上で点滴をすることになるとは思わなかった。時間はすでにお昼を過ぎている。とにかく明日までに下山できないとどうなってしまうのだろうと、すごく不安になってしまった。点滴を開始してから子供達も静かにトランプなどで遊んでいる。他のスタッフものんびりとした雰囲気でも過ごしている。「こんなことめったに無いから、点滴をされている僕と記念写真を撮ろう」ということになりみんなで写真を撮った。「きっと僕が熱を出さなければ、もっとほかのことができたのにな」とかなり凹んだ気持ちになってしまった。もうすぐ点滴が終了しそうだな、という時にS先生が「お腹空いていないか? うどんでも山小屋から買ってきてあげるな」と言ってくださり、ありがたく頂くことにした。朝からあまり食べていなかったせいか、とても美味しく食べることができた。「顔色もいいし、また熱を計ってみよう」ということとなり、いざ検温である。結果は…38.2℃!!! 一同「え————!!!」「どうして!?!?!」の声。S先生も「あれだけやって熱が下がらないわけは無いぞ!」とびっくりしていた。僕自信も、「嘘だろ!? 体調いいぞ…」という感じである。



災い去りて…

大人達が悩み困っているときに、長女のあさちゃん「私にも熱計らせてー」と言うので、体温計を渡してあげた。「明日の下山がどうなってしまうのかわからないときなのに、子どもって本当に無邪気だなあ」と思った。そして、1分後。「わーお父さん、私も39℃の熱があるよ??」ん? 「何!? ちょっと、お父さんにも貸してみなさい」。S先生も自分でも計ってみた。ピピッ「俺も38℃ある…」 そうなのである。誰が計っても38~39℃になってしまうのだ。つまり、僕自身が熱があった訳ではなく、体温計が壊れていたのだ。しかも、予備の体温計まで同じ症状で壊れていたのだ。では、なぜ僕は朝食を吐いてしまったのだろうか。よく、考えてみると、昨日の夜、もうすぐ下山してしまうからということで山小屋のスタッフと飲み会をしたのだ。とても楽しく、たくさん飲んだ記憶がある。そう、朝、気持ち悪かったのはただの二日酔いだった(!)のだ。診療所の雰囲気はどっと明るくなったような気がした。そして、みんなもいつも通りの態度に戻っていく。いや、いつも以上に厳しくなったかも。S先生も「自分で食べたうどんだから、食器を洗って小屋に返してきてね」、Oさんも「明日の荷物なんです、中島さんは自分の荷物以外に

これもお願いしますね」等等 etc…。僕も苦笑しながら「はい」と言うしかなかった。とんでもないハプニングだったが、みんなの優しさを感じることができてちょっと幸せな気持ちになれたのも事実だ。S先生が元気になった僕を見て「これだけ短時間にあれだけの解熱剤と抗生物質を健康人に投与しても、意外に問題が無いんだな。勉強になったよ」と言われてしまった。僕は先生のお役にたててとても幸せです、はい(笑)。

診療所最終日、今日は、とうとう下山である。いろいろな体験ができて、とても楽しく過ごすことができた。なによりの功績は『なんちゃって発熱事件』だろうか。あれがなければ電子体温計が壊れているのがわからなかったのだ。先生達も申し送り事項に新しい体温計を持ってくるように指示を出していた。『気は心』という言葉を妙に思いだしてしまった。

たくさんの感謝の気持ちも含め山小屋の人達に挨拶をして下山した。とても楽しくたくさんの思いでもできた。帰りながら山を振り返り、もう来ることも無いのだろうかと考えていたのだが、まさか再びここに来ることになるとは、この時点では思いもしなかった。

再び双六診療所へ

2年後の夏休み。寂しいことに、なにも予定が無かった。何処に行こうかと考えているときに、またS先生とお話をする機会があり、山の話になった。その話の中、いろいろな事情によりしばらく山に行けなくなるため、今回また双六診療所に行くという。僕はその話を聞いて、急に「え!? しばらく行けなくなってしまうのか! 行かなければ!」という気持ちになり、同行させて欲しいとお願いをした。S先生からは「もちろん、OK!」の返事をいただき、またまた、双六診療所に行くことになった。

このときS先生から出された条件がひとつ。条件というよりお願いであるが、「前回のよう一人で釣りには行かないこと」。初めて本格的に山に登った素人を単独行動させ、さらに黒部川源流で馴れない沢登りまでさせてしまった。何も無かったからよかったものの、今回もそうとは限らない。よくよく考えて行かせないことにした様子である。僕にしてもそこまで危険だったのかと、我ながらすごいことをした気分になってしまった。そんな話を聞いて「それでも僕は釣りに行くのだ!」と言えるほど勇気も根性もない。あるのは

命を大事にする気持ちだけだ。S先生に「行かない」と約束をして一緒に山へ行けることになった。

今回のパーティは変わっていて、先に大学の先生達が3人登っているという。僕達は後発で登るパーティである。メンバーはS先生、山岳部の男性2人、女性1人の3人、そして山岳部OBの方、そして僕の合計6名。ルートも前回同様のコースを登る。出発の日、一度登っている分ほんの少しだけだが余裕があり、周りの景色を楽しみながら登ることができた。天気も良く空は快晴で槍ヶ岳

遥かなる槍ヶ岳山頂

次の日の朝、4時30分に出発。出発をし1時間程経った頃、樺沢岳山頂で御来光を拝むことができた。樺沢岳は2755mの山だ。御来光を見ていると、どこかの大学の学生達が相手の胸を揉むような仕草をしつつ、みんなで「モミ、モミ、モミ」と言いながら朝日を見ている。よく話を聞いていると「もみさわ岳だけにモミモミ」だそうだ。朝一番からテンションが高いなあと感じてしまった。朝日が出てしばらくすると天気が崩れ始め、風も出てきて寒いので早めにレインスーツを着用することにした。

槍ヶ岳までの道のりは山の稜線を歩いていくコースである。つまり山の頂上を道なりに歩いて行くので左右の両方が崖になっているような場所も何箇所もあり、また鎖で手すりがついている場所もある。その中の一箇所が僕が「いや～本当に怖いですね。落ちたら洒落になりませんね」と言うと、山岳部の学生さんが「大丈夫ですよ。しっかり歩いていれば問題ありませんよ。あ！そういえば去年ここから滑落して亡くなった人がいたらしいんです。気をつけましょうね」と言われてしまった。思わず『滑落している人がいるんじゃない！亡くなってるんじゃない！大丈夫なわけ無いじゃん！…』と心の中で叫びつつ「そうなんですか、気をつけますね」と笑顔で答えてしまった。それから怖い場所に遭遇しながら、それでもみんなで楽しみながら行くことができた。ようやく

がとても良く見える。前回、僕は独りで釣りに行ったため槍ヶ岳には登っていなかった。今回はこの山に登ることを目標にしようと心に決めた。双六診療所に到着すると、先発の先生達が出迎えてくれた。みなさん、大学病院の漢方薬の先生達で、そのうちのお一人は60才を過ぎている偉い先生だった。自己紹介を終えて話をしていると先生達も槍ヶ岳に登りに来たのだという。S先生は診療所を空けるわけには行かないので、S先生以外の全員で行くことになった。

槍ヶ岳山頂下にある槍ヶ岳山荘に到着。この山小屋に到着したのが11時くらいだったと思う。まず、昼食を食べてしばしの休憩。この山小屋は収容人数も650名と収容人数も多く、また人気の高い槍ヶ岳にあるために非常に混雑していた。それに標高3000m近い場所にあるにもかかわらず、焼きたてのパンを出してくれるという凄い山小屋だ。休憩の後、槍ヶ岳の山頂を目指し、登り始めた。山頂までは30～40分程度とのこと。山岳部の学生さんから注意点を一つ聞かされた。「三点は必ず確保してください」。三点確保とはつまり、登るときに放していいのは両手、両足のどれか一つだけ、ということらしい。つまり、左右の足を着けていたら放していいのは右手か左手どちらかだけ、ということだ。これさえ守っていれば滑落しないはず(?)だそうだが…。そんな攀じ登るような場所なのかと覚悟をきめて、いざ山頂を目指した。



僕の登山のクライテリアは、「細い山道をザックを背負って、えっほ、えっほ、と二本の足でしっかり踏みしめていく」というものだ。しかし、ここは違う！。さっき説明してもらった三点確保の意味がやっとわかった。なぜ、ザックや余計な装備を山小屋に置いてきたのか、今わかった。凄い岩場なのだ！。登山というよりロッククライミングに近い。上に向かって攀じ登っていく、しかも、上に行けば行くほど直角になるような気がしてくる。下を向くとさらに角度が急なことがよくわかり、かなりビビってしまう。「もう下を向くのはやめよう」と心に誓った。

山頂に近づくと梯子ポイントが現れた。それだけ急な角度の場所ということだ。本当に怖かった。遊園地の絶叫マシンもとても怖いと思う。いや怖さは絶叫マシンのほうが上かもしれない。しかし絶対に違うことが一つある。それは、この登山では安全は自分にかかっているということだ。適当に登っていれば滑落して命にかかわるのだ。

こんな思いを秘めながら攀じ登り、やっと頂上に到着である。頂上は20畳程の広さで小さな祠

があるだけだ。小雨が降っていたので視界はよくなかった。みんなの話を聞いてみると、天気が良ければ富士山が見えるそうである。富士山！？、今いるここは岐阜県である。富士山があるのは静岡県…、3180mの高さになるとそんな遠くまで見えるのかと感心してしまった。しかし、天気が悪く、高いことが良くわからない。ある意味景色がわからなくて本当に良かったと思う。なぜなら、この20畳の空間から下は、ほぼ直角になっている。つまり断崖絶壁なのだ。



またしても不吉な前兆

記念写真を撮ってから、帰途についた方がいいが、このとき初めて上りより下りのほうが格段に怖いことに気づいてしまった。大人になっても泣きたいくらい怖いことがあるものだと思った。いくら泣いたところで、自分が動かなければ帰れない。絶叫マシンと違い、目をつぶり歯を食いしばっていれば元の場所に到着するのとはわけが違う。とにかく、三点確保をしっかりとしていれば大丈夫と自分に言い聞かせ、がんばって下りた。無事に下りたときの安堵感は何ともいえなかった。生きていることは本当にすばらしいと思う。さて、ここからは診療所に帰るだけだ。このときの時間が13時頃だった。

槍ヶ岳の到着時刻を考えると診療所に帰還する時刻は18時頃になるかもしれない。このまま帰ると日が沈む可能性が出てくる。学生さんが年

輩の先生に「僕と先生の二人で槍ヶ岳の小屋に1泊しますか？」と提案したが、「みんなと一緒に帰るよ」と言われたので、みんなと一緒に帰ることになった。

下りは、単純に考えると上りよりも辛くないようなイメージだが、じつは下りのほうが膝にかかる負担が大きいため非常に疲れる。今回はさらに小雨が降っており、気温も低く、8月のお盆時期にもかかわらず10℃くらいしかない。みんな帰りは無言になり、上りより休憩の回数も多くなってきた。雨の中稜線を歩くと下から雨が降ってくる。山に風が当たり下から上に吹き上げてくるため、まるで下から雨が降ってくる感じがするのだ。下を向いても前を向いても雨がくるので、顔はフードを被っていても濡れてしまい、とても寒くな

った。休憩の回数が増え、時間もかなり遅くなってきている。

天気が悪いせいもあり暗くなってきたため、ヘッドライトをつけることにした。しかし、暗くなることを想定していなかったせいか、ヘッドライトを持ってきていたのは7人中3人だけだった。僕も荷物が増えるだけだから置いていこうとしたのだが、S先生に「念のために持っていきな」といわれて持ってきていたのだ。パーティの並び方もヘッドライトを持ってきている先生を先頭にして、あとはヘッドライトを持っている人を間に入れる並び方に変えて出発した。この時は、まだ多少明るかったのだが、徐々に「これ以上暗くなるとまずいなあ」と感じるようになってきた。寒さと疲労のために、だんだんボーッとしながら歩くようになり、さらに心細くなっているせいか、低い木の影を「あ！人がいる！」と見間違える回数も増えてきた。これは僕だけでなく他のメンバーも同様のようだった。こんな状態だと幻覚（大げさな言い方だが）も見えたりするのだな、とってしまった。

結局、日も沈んですっかり暗くなり、小さなヘッドライト3個で進んでいると「もしかして今夜

この辺でビバークすることになるのだろうか」と考えるようになってきた。かなり寒い。でも、みんなで集まってじっとしていれば、どうにかなるだろう。食料も携帯食として持ってきているお菓子を全員分集めれば明日の朝まではどうにかなるのではないかと、思った。それでも、もう少しで診療所に着くことを信じて歩いていた。このときのことを詳しく思い出そうとしても暗い道と寒さと心細さのイメージしか出てこない。

どれだけ歩いたがわからなくなり、時間を見ると19時になっていた。6時間は歩いていることになる。そろそろ到着してもいいのではないかと思うのだが、山小屋らしき明かりはまだ見えない。たまたま木と人を間違えるくらいだ。



そこに希望の光が

風と雨の中、ひたすら歩き、「本当にたどり着くのだろうか…」と思い始めた頃、また前方に人の影らしきものを2つ見つけ、内心「あ…、またか…」と思ったのだが、目を凝らすとヘッドライトの明かりも見える。「え!？」と学生さんも反応している。誰かが手を振っている。「本物の人だ!!」ビックリしたのとうれしい気持ちがごちゃごちゃになった。道は間違いなく診療所に近づいていたのだ。S先生と山小屋のスタッフの方が、帰りがあまりにも遅いために心配して来てくれたのだ。S先生と再会したときに肩を叩かれながら「いやー、何事も無くて本当に良かった。山小屋はもうすぐだよ」と言われて、僕は到着もしていないのに体の力が抜けるような感じがした。S

先生が持ってきてくれた予備のライトをつけたので、とても下山しやすくなった。帰りながらS先生は「本当に心配したよ。東京のIさん（僕の上司）になんて言えばいいのか考えてしまったよ。それに遭難記者会見も覚悟した」と言われた。僕は「心配させてすみませんでした。でも、記者会見なんて大げさですよ」と答えると、S先生は真面目な顔で「中島君達は遭難したんだよ」と言われる。思わずビックリしてしまった。

そんな話をしながら30～40分も歩くと診療所に到着である。とにかく全員が濡れネズミからだけは冷え、そのうえ空腹だった。ストーブを点け、学生さん達は疲れているのに夕食を作り始めてくれた。一緒に行った先生達も「いやー、ど

うなるかと思いましたねえ。ビバークすることになるかと思いましたよ」と言っている。やはり考えることは同じらしい。

その日の夕食兼飲み会は大騒ぎとなった。無事に帰って来てホッとしたので、こんな飲みにな

山の怖さを実感

S先生に、あの時ビバークしていたらどうなっていたか聞いてみた。天気、気温、持っていた食料などを伝えると、「まあ中島君だけの体力を考えれば大丈夫だろう」と言われた。しかし、「年輩の先生も一緒のことを考えれば凍死だってありうる」とも言われビックリしてしまった。いくら寒いとはいえ夏なのに凍死なんてオーバーだなと思っている僕に、S先生は『疲労凍死』のことを教えてくれた。一般にいわれる『凍死』とは、体温がだいたい32℃以下に低下して体が正常な機能を失くなり死ぬことである。一方、『疲労凍死』は、気温が10℃位でも風雨で体温がどんどん奪われ体力も消耗している状況で死にいたる場合をさす。それに、登山で下山の予定時間内に帰れず、他人の力を借りて下山するということは、それだけですでに遭難なのだ、ということも教えていただいた。どのようなことに対してもいえることだが、何事も甘く見ているととんでもない目にあう、ということだろう。しかも、それが死につながることであればなおさらだ。すぐ隣に死がいたと考えると、本当に無事に帰って来られてよかったと感じた。

次の日、先発隊の先生3人組が先に下山していった。この日は天気も良く、先生たちが帰った後トランプをしたり診療所の布団を干したりして過ごした。午後になり、「山小屋のすぐ近くで胸が痛くなり動けない人がいる」と連絡が入った。まず、S先生と学生さんが様子を見に出て行った。僕も外に出て見てみると山小屋から200mくらい離れたところに人が集まっていた。そのまま様子を見ているとS先生がジェスチャーで呼んでいるのが見え、そちらに向かった。患者さんは

ったのだと思う。「生きているって素晴らしい!」、誰もがそう感じていたのだろうと思う。疲れているのに飲み会は深夜にまでおよんだ。僕とS先生は隣の部屋で先に寝ることにした。

65歳くらいの男性で胸が苦しいとのこと。S先生に「診療所から酸素ボンベを持ってきて欲しい」と言われ、急いで診療所に戻った。診療所まで走って戻ったのだが、診療所に着くと今度は僕がとんでもなく息苦しくなり息を整えるのに大変だった。よく考えればここは標高2600mの場所、地上より遥かに空気が薄いはずだ。そんな所で本気で走ってしまったのだから当然の結果かもしれない。一瞬、「僕にも酸素をくれ〜」と思ったが、ぐっところえボンベを背負って今度は小走り程度に急ぎ現場に届けた。

患者さんを診療所に運んでから僕はただウロウロするばかりだった。問診、検温、血圧、点滴と次々にS先生が行っていく。診療所に血算、生化学の分析装置、心電計でもあればもう少しは役に立ったかもしれないが、山の診療所にそのようなハイテク機器は導入されていない。ここではS先生に頼まれる雑用をこなすのが精一杯だ。あまり関係がないのだが、なぜか「下山したら献血にでも行って少しは社会に貢献しよう」と心に決めた。

薬なども投与し、1時間程様子を見たのだが、多少症状は改善されているものの自力で下山できる保障は無いため、ヘリコプターを要請することになった。ヘリコプターが到着すれば患者さんを乗せ麓の病院まであつという間である。だいたい30分もあれば着くという。僕達が普通に下山すると5~6時間。さすがヘリコプター!、すごい!

S先生は「いつもヘリコプターを要請した後、本当は自力で下山できたのではないか、もう少し様子を見れば回復したのではないか」と考えてし

もうそうである。先程述べたように、診療所には検査をするための機器はない。ヘリコプター要請は医師もよく考えて考えて考え抜いてのことなのだ。だから、みなさんも「なーんだ、いざとなったらヘリコプターがあるじゃん」と考えず、生

きるか死ぬかの時に要請するのだと思って欲しい。山を楽しむのは、やはり体調を万全にしてこそすばらしい景色や体験ができるのではないかと僕は思う。

さらば双六診療所

下山日はあいにくの雨であった。山小屋のスタッフにご挨拶をして、雨の中を出発だ。雨は非常に激しく降り、帰り道はまるで川のようになっていた。帰りのパーティはS先生、学生さん3人、そして僕の合計5人である。体力のあるメンバーだったので、雨にもかかわらず下山スピードはとても速く、僕は遅れがちになった。道は雨で濡れ滑りやすくなっている。下りのせいもあるが、僕はたびたび滑りそうになり、このスピードで下るのが少し怖くなっていた。徐々に遅れがちになっているのを学生さんが気づいてくれた。S先生に「少し、スピードを落としましょう」と提案してくれた。おかげで微妙にスピードが落ちている気がしたが、微妙といえば微妙なくらいの感じでもある。この登山にむけて前回もそうだったが、約1ヶ月前から毎日、筋トレと10～15分程度走りこんでいた。多少、体力をつけたつもりだった

のに、それでも遅れてしまう。また、半ベソになってしまった。いくら半ベソでも本気で泣いても、ここでも自分でがんばらなければゴールすることはできない。とにかく、みんなの足手まといにならないように、まるで川のようになった山道を下りて行った。ついに麓に着いたときはうれしさよりも「やっと雨の中を歩くことが終わった」という安心感でいっぱいだった。時間を見てみると約3時間半で下山してしまった。前回のときは休憩を長めにとったせいもあるが、5時間くらいかかったと思う。さすがに半ベソになるくらいスピードで下りてきたわけだ。無事に到着したから言えることだが、あの雨の中ただらと下山するよりは多少きつくても気持ちを集中させて一気に下りてしまったほうが楽だったのかもしれない。車で町に戻る頃は天気も回復した。

山に教えられたこと

今回の登山でも、とても貴重な体験がたくさんできた。槍ヶ岳制覇、その帰り道での遭難事件、そして診療所からのヘリコプター搬送。どれもこれも下界では味わえない経験ばかりだ。これからの僕の生活の中で、辛かったり苦しかったりしたときに山での経験を思い出してがんばりたいと思う。みなさんもぜひ、自然に触れてみて欲しい。なにかに迷ったり苦しかったりしたとき、自然の

中に行くことで癒されるのではないだろうか。少しばかり山に登ったくらいで偉そうなことはいえないが、きっと自然の中でなにかを感じる事ができると思う。なにもこの話のような登山などしなくても、近所の河川の土手を歩くだけで、いつもと違った気持ちになれるのではないだろうか。

PS・S先生へ

本当に僕のことを誘っていただきありがとうございます。自分ではなかなか体験できないようなことができ、とても楽しく過ごせました。しばらく行けないと言われてましたが、また登る時が来ましたらぜひ一緒にさせてくださいね。楽しみにしています。

《完》



●記憶もいつしか色変わり

毎日の染色、お疲れ様です。

染色液は瓶に入った液体として買っていますが、その昔は色素がそれぞれ小さな容器に入れられていました。そのずっと昔は、自然にある顔料（石を粉にしたもの）や植物を調合していろいろな色を作っていました。その昔とそのずっと昔のちょうど中間で、イギリスの18歳のパーキン少年がマラリヤの特効薬のキニーネを作ろうとして青紫色の色素を合成してしまいました。これがモーヴとかアニリンパープルとよばれ、合成色素の先駆けとなりました。今では、天然色素はヘマトキシリンとカルミンしか僕たちの仕事では使われてないみたいです。モーヴの青紫色は時の

ビクトリア女王をもとりこにし、そのブームは20～30年間も続いたそうです。

「知に働けば角が立ち、情に棹させば流される。とかく人の世は住みにくい」で始まる「草枕」ですが、その中にミレーの「オフィーリア」が出てきます。ハムレットの恋人の湖水に浮いている絵です。その絵の模写が「草枕」のふるさとである熊本県の小天（おあま）温泉にあり、先日見てきました。オフィーリアのドレスは緑色でした。テイトギャラリーの原画は青紫色のドレスだと思っていたのですが…。6ヶ月前の記憶も毎日のヘマトキシリン・エオジン染色で色変わりしていました。

ウンチクの種

●オフィーリア(ミレー作)

シェークスピアの四大悲劇『ハムレット』第4幕7章の一場面。ハムレットは、父を毒殺して母と結婚した叔父に復讐を誓うが、なかなか決行できず、その間に恋人オフィーリアが狂死。ミレーはそのオフィーリアの姿を、美しくも細密な写実で描いた。モデルは後に同じラファエル前派の画家ロセッティの妻となったエリザベス・シッダル。風景はホッグスミル川を元にして描かれた。





ちょっと読んでみませんか？

改訂新版 『職業性石綿ばく露と石綿関連疾患 ～基礎知識と労災補償～』

森永謙二・編（三信図書 2005）

綿、羊毛、麻など、有機繊維を上手に利用してきた人類は、同じようにほぐすと糸や布に織れるしなやかさがありながら、燃えず腐らず引っ張りに強く保温性のある鉱物の繊維を、石綿（アスベスト、アミアントス）と呼んで昔から日用品や貴重品の保存などに用いてきた。

石綿は、蛇紋岩や角閃石が繊維状に変形した天然の鉱物の中で、蛇紋石系（クリソタイル）と角閃石系（クロシドライトなど）に大別される。アスベスト（asbest）の名称は、ギリシア語の「σ β ε σ τ ο」 ”しない（ない）” という意味の「a」と、“消化できる” という意味の「sbestos」を語源としており、その繊維1本の細さは、だいたい髪の毛の5000分の1程度である。

紀元前数千年頃のフィンランドでは、土器がひび割れないようにアンソフイライト石綿を粘土に混ぜ、こねて使っていた。古代エジプトでは、紀元前数百年頃にミイラの梱包に石綿布が使われていたが、わが国でも平安時代後期の奥州藤原氏のミイラ保存に石綿が使われていたことが最近判明した。これは石綿の永久に腐らない性質を利用したものである。また、古代ローマでは、ランプの芯としても使われていたという。ちなみに、マルコ・ポーロの口述によるとされる『東方見聞録』には、ヨーロッパでは「火に焼けないサラマンダーの皮」として記載されている。中国では、周の時代に征服した西戎からの貢ぎ物として石綿の布が入り、火に投じると布は焼けずに汚れだけが燃えてきれいになることから「火浣布（火で洗える布）」と呼ばれ珍重されていた。

日本では、かぐや姫で有名な平安時代に書かれた竹取物語に、天竺で織られた石綿布と思われる「火鼠の皮衣」というものが出てくる。かぐや姫からこの火鼠の皮衣を望まれたのは、右大臣の安倍御主人（あべのみうし）。後に陰陽師として有名になる安部晴明の先祖である。平賀源内は、明和元年（1746年）に、火に入ると汚れだけが燃えて洗ったように綺麗になる布があ

ることを蘭医から聞き、石綿で布を織り「火浣布（かかんぶ、かかんぶ）」と名づけて幕府に献上している。大きさ10cm平方ほどの平賀源内が織ったといわれる火浣布は、現在、京都大学図書館に保管されている。

石綿（アスベスト）は耐久性、耐熱性、耐薬品性、電気絶縁性などの特性に非常に優れ安価であるため、日本では「奇跡の鉱物」などと珍重され、建設資材、電気製品、自動車、家庭用品等、様々な用途に広く使用されてきた。しかし、空中に飛散した石綿繊維を肺に吸入すると約20年から40年の潜伏期間を経た後に肺ガンや中皮腫という病気を引き起こす確率が高いため、2005年現在では「静かな時限爆弾」などと世間からおそれられている。日本では1970年代以降の高度成長期にビルの断熱保熱を目的としてアスベストが大量に消費された。その結果、一般に言われる潜伏期間が終わりを受け始めた21世紀初頭より、アスベストが原因で発生したと思われる中皮腫や肺ガンによる死亡者が増加しており、2040年までにそれらによる死亡者は10万人にもものぼると予測されている。また、アスベストが使用されたビルの寿命による立て替え時期が本格的に始まり、新たなアスベストによる被害が生まれてしまうのではないかと懸念されている。

今回紹介する森永謙二が編集した改訂新版『職業性石綿ばく露と石綿関連疾患～基礎知識と労災補償～』は、石綿の基礎知識として、石綿の種類と物性、用途と日本での使用状況、職業性ばく露の機会、石綿ばく露の医学的所見（胸膜プラーク・石綿小体）を、石綿関連疾患の医学的解説として、健康障害の歴史、疫学・臨床・病理からみた石綿関連疾患を分かりやすく、しかも学問的に解析し報告している。また、われわれと直接的には関連がないが、石綿関連疾患と労働基準法や労働者災害補償法についての解説も詳しい。われわれが日常的に遭遇するであろう石綿関連の疾患を理解するため、ぜひ一度この本を熟読されることをお勧めする。

なお、石綿疾患に関連して、喀痰またはホルマリン固定材料から石綿を抽出する必要性が認められた場合に
 用できる簡易的な方法をここに記載する。

【アスベスト抽出方法】

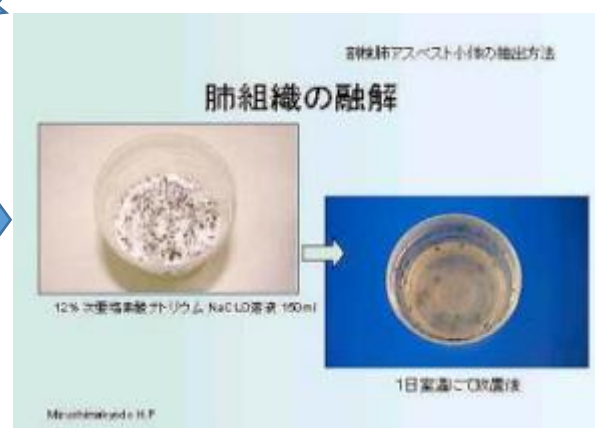
【アスベスト抽出方法】

【手技】

1. ホルマリン固定された肺組織試料約5gを切取り、メスで数mm角に細切する。
2. 細切した試料の湿重量を秤量した後、電子レンジ(500ワット)または57℃パラフィン溶融器で乾燥。
3. 1g秤量後の試料に12%次亜塩素酸ナトリウムを150ml加え攪拌。
4. 完全に溶解後、1,500回転5分遠沈し、上清を注意深く除去。
5. 50mlの遠沈管にクロロホルム20mlを管壁に沿って加え、さらに50%エタノールを等量加えよく振盪する。次に、遠心管に分注して800回転で10分間遠沈し、エタノール層、炭粉層ならびにクロロホルムの3層に分離。
6. 沈渣を残し全てを注意深く除去後、沈渣に95%エタノールを15ml加え攪拌後、ミリポアフィルター(SM型、孔径5μ)で吸引濾過。
7. フィルターは無染色のまま乾燥させ、キシレンで透徹封入。
8. フィルター上のアスベスト小体は光学顕微鏡400倍で観察し、長さが約1~20μm棒状或いは鉄アレイ状の形態をなしているものを算出。
9. *組織材料の処理は①から、喀痰の処理は②から行う

Mizushimakyodo H.P

岡山細胞検査士会 PACHON13 P16 川崎医科大学 島氏 よしひろ



別検肺アスベスト小体の抽出方法

遠心分離処理

1,500rpm 5分 遠心

※アスベストは、痰液、無機物質などと一緒に試験管の底の遠沈中に集まる。
上清を注意深く除去。



Meishinmedico H.P

別検肺アスベスト小体の抽出方法

炭粉の除去処理

クロロホルム20mlを加え、さらに50%エタノールを等量加えよく振盪



Meishinmedico H.P

別検肺アスベスト小体の抽出方法

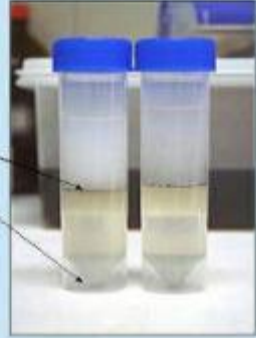
遠心分離処理

800rpm 10分 遠心

炭粉は、中層
アスベストは、底

※上清を注意深く除去。

96%アルコールを入れ浮遊液を作成




Meishinmedico H.P

別検肺アスベスト小体の抽出方法

炭粉の除去処理

エタノール層、炭粉層ならびにクロロホルムの3層に分離



Meishinmedico H.P

別検肺アスベスト小体の抽出方法

フィルターによるアスベストの回収

深層濾過用のフィルカップを利用 (マホー工業)



Meishinmedico H.P

別検肺アスベスト小体の抽出方法

注射器を利用して使いアスベスト小体を回収

5μのポアフィルター

深層濾過用のフィルカップを利用 (マホー工業)



Meishinmedico H.P

別検肺アスベスト小体の抽出方法

検鏡

右肺上葉切除症例から抽出したアスベスト小体

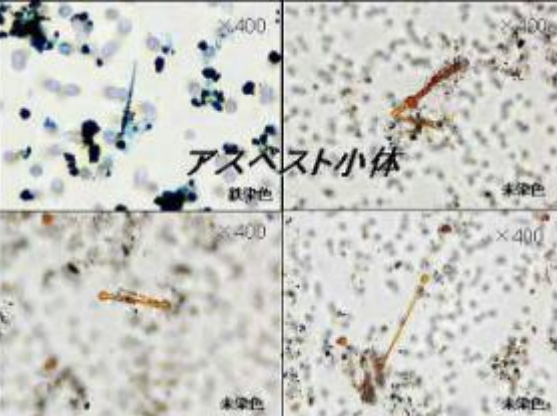


Meishinmedico H.P

別検肺アスベスト小体の抽出方法

アスベスト小体

鉄染色 ×400
未染色 ×400



Meishinmedico H.P

■四の五の言わずに読んでみられい！

コラム うちの本棚③

『ビジネスと人生と聖書ー勝利へのマスターキー』

著者:三谷康人(みたに やすと)

発行:いのちのことば社 サイトブックス

定価:(本体 1600 円+税)

「品性は高潔さと正義感によって生まれる。品性のない人物を絶対に経営者にはいけない」——経営学者ピーター・F・ドラッカーの言葉である。

今回ご案内する『ビジネスと人生と聖書』の著者、元カネボウ薬品会長三谷康人氏は、若き日にこのドラッカーの著書と出会うことによって経営の基本、事業への取り組みの姿勢、そして、経営とはどういうものかを学んだという。本書は三谷氏が2001年、VIP ビジネス・リサーチ・インスティテュート主催で「ビジネスと聖書」と題し、氏自身のビジネス体験を元に7回シリーズで講演した内容をまとめたものである。

三谷康人氏は鐘紡(株)グループの中のカネボウ薬品(株)を、売上高10億円から400億円を越える企業に育て上げた実力者である。『ビジネスと人生と聖書』には三谷氏の体験を通して得た豊かな知恵と業が溢れており、それらはビジネスに関わる者にはもちろん、広く人が生きる上に力と希望を与えてくれるものと思われる。何故なら三谷氏にとってのビジネスと人生の目指す方向が聖書の語る「愛」の原理に根ざしているからである。

三谷氏の尊敬するドラッカー博士はクリスチャンであり、世界でもっとも有名な経営コンサルタントであり、また、世界的な大企業の成長要因を多面的に分析してきた人である。ドラッカーは、良い企業風土が形成されるための絶対的条件として次のことをあげる。「①長所を強調する組織であること。②高潔を強調する組織

であること。③公正、正義を強調する組織であること。しかも行動が伴っていること。」後に三谷氏自身がクリスチャンになって初めて、ドラッカーの語るところが深く理解できるようになったという。三谷氏の傍らには常にドラッカーの著書と聖書があり、氏のビジネス人生を導いてきた。

本書には成長する企業の特徴、組織を生かす人材の条件、個人の潜在力を引き出す方法、業績を上げる鍵等々、具体的に興味深い内容が満載である。

とくに三谷氏自身がドラッカーの語る「顧客の創造」の意味を真に理解することになった漢方薬『八味地黄丸』のマーケティングに関する体験は興味深い。三谷氏は、「『顧客の創造』の意味が本当にわかったとき、時代を超えて成長を続ける企業の核心をつかむことができるようになった」と語る。

「ビジネスの世界は絶えず変化している。したがって、時間を越えて通用する具体的ノウハウといったものは無い。ただ、ビジネスに立ち向かうとき、勝利者となる普遍のスピリットというものは存在するのではないだろうか。皆さん方に少しでも参考になると思える普遍のスピリット、ビジネスの発想法や視点について述べていきたい」として始まる三谷氏の講演、本書を通して参加されてみてはいかがだろうか。

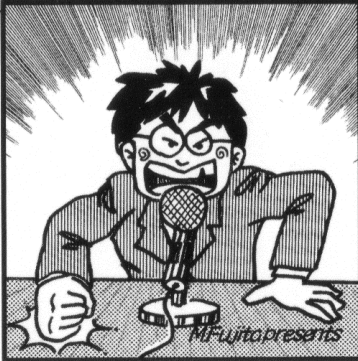
by K子

三谷康人氏の経歴：1929年広島県に生まれる。慶応義塾大学卒業後、鐘紡(株)に入社。鐘紡(株)取締役、カネボウ薬品(株)社長、同会長など繊維、化粧品、薬品の各部門の要職を歴任。現在は日本漢方製剤協会顧問、日本ランチェスター協会監事。

●超個人的音楽論

「青春歌年鑑・七〇年代超個人的ベスト四〇③」

大講釈 2005



1975年 DISC1

- 1-1 シクラメンのかほり(布施明)
- 1-2 昭和枯れすすき(さくらと一郎)
- 1-3 思い出まくら(小坂恭子)
- 1-4 港のヨーコ・ヨコハマ・ヨコスカ(ダウン・タウン・ブギウギ・バンド)
- 1-5 カッコマン・ブギ(ダウン・タウン・ブギウギ・バンド)
- 1-6 心のこり(細川たかし)
- 1-7 我が良き友よ(かまやつひろし)
- 1-8 冬の色(山口百恵)
- 1-9 スモーキン・ブギ(ダウン・タウン・ブギウギ・バンド)
- 1-10 『いちご白書』をもう一度(バンバン)
- 1-11 私鉄沿線(野口五郎)
- 1-12 いつか街で会ったなら(中村雅俊)
- 1-13 やすらぎ(黒沢年男)
- 1-14 面影(しまざき由理)
- 1-15 夏ひらく青春(山口百恵)

このシリーズも回を重ねること第3回。「もうそろそろいいんでないの？」との世間の声には耳も貸さず、ご意見無用とばかりに、わたしの講釈はなおも延々続いていくのであった。だって最初に「4回シリーズでやるぞ」って言って始めたんだから仕方ないじゃない、ねっ(じつは5回、いやひょっとしたら6回、ことによると7回くらいやらなきゃ収まりきらない気配が濃厚)。ま、あきらめてもうしばらくお付き合いのほど、よろしくね。

さて、前回までは、「各年ごとのラインナップ30曲の中から、わたしが先にセレクトしたお気に入り数曲について講釈をたれていく」という形

式で進めてきたわけであるが、今回から少しやり方を変えてみたいと思う。なぜならば、今回のラインナップである75年のナンバーあたりから、簡単に4、5曲選び出すということがまことに難しくなってしまったからである。先に無理やり曲を選んでみても、必ずや講釈し残しが出て、のちのちの後悔を招くは必定。よって今回から、全曲総当たり戦で講釈を行なったのち、その結果を見て、わがベストセレクトを決定していくことにしたい。つーわけで、なんか長くなりそうなのよ。ごめんね。ではさっそく75年のラインナップ、いかせていただきます！

○理屈をこねたい1975年

筆者は14歳、中学2年生である。この年初めてわたしはギターを手にした。音楽に目覚めた、といえいかにも大げさだが、まあなんとなく音楽というものに対して多少なりとも理屈をこね始める、そんなきっかけとなる出来事ではあったわけだ。当時の音楽シーンは依然として歌謡曲全

盛であったが、一方でフォークがアングラからメジャーへと加速し、ニューミュージック（今考えるとなんか変な音楽用語だよなあ）なるものの胎動が始まった時期であった。そんな背景を頭の片隅に置きながら、この年のラインナップを順に料理していこう。

1-1 シクラメンのかほり（布施明）

布施明については前回の講釈でもちょっと触れた（覚えている？）。かつて、布施明といえば、カンツォーネ系歌謡曲歌手と誰もが認識していたのだったが、ここにきて小椋佳とのコラボレーションが実現、フォーク系へ殴り込みをかけた形となった。おそらく、フォークがメジャーへとなだれを打って進出してきた状況を見越しての判断だったのだろう。結果、大当たりとなったのはご承知のとおりで、「シクラメンのかほり」は、この年のレコード大賞を受賞するに至る。なにしろ、布施明がフォークギターを抱えて歌う姿は印象的で、いまだに物まね番組ではこのスタイルを

使うことが多いようだ（岩本恭生とか）。ところで、どうでもいいようなことだけど、どうして小椋佳の曲って、本人が歌うのと誰か別の歌手が歌うのとで、おんなじ曲なのに微妙にメロディーが違うんでしょうね。「シクラメンのかほり」もそうだし、陽水の「白い一日」、中村雅俊の「俺たちの旅」…。あえてそうしてるのかなあ。そうそう、ユーミンとハイファイセットも「卒業写真」では微妙にメロディー変えてたし、これってなんか戦略の一つなのかなあ。いや、まあどうでもいいんですけど、前々から気になってました。

1-2 昭和枯れすすき（さくらと一郎）

ドラマ「時間ですよ昭和元年」の劇中曲として使われ100万枚を超える大ヒット。どちらかといえばほんわかムードのドラマにあって「♪貧しさに負けた、いえ世間に負けた」で始まるドヨンとしたどん底感、新鮮というか、いっそ清々しくさえあったような気がする。イントロの大正琴の音色がまたいい味出してたよなあ。この曲、演歌系のデュエットものにしては珍しく、サビの部分でちゃんとハモリが出てくる。しかも、歌ってみるとわかるけど（わたしはちょっとした事情

でこの曲、かなり熱心に練習したことがあります）、ちゃんとハモろうと思った場合、とくに女性のパートはメロディー的にも音域的にもかなり難易度が高いので、誰もがおいそれと歌える楽曲ではないだろう。当時、水曜9時の枠の番組からはたくさんのヒット曲が生まれた。なかでも「昭和枯れすすき」はその代表格だ。個人的には、この時間枠の「寺内貫太郎一家II」で使われた「北へ帰ろう（徳久広司）」もかなり好きな一曲。皆さん、ご存知？

1-3 想い出まくら（小坂恭子）

時代が味方する、そんなヒット曲がしばしば存在するわけだが、「想い出まくら」もまたそういう曲のひとつであるかもしれない。しずしずと

いくぶん暗く落ち込みつつ、大きな盛り上がりもなく流れていくこの曲、ここ20年以内に発表されたとしたら、どう転んでもヒット曲にはなりえ

なかったであろう。75年当時の、あの時流であつたればこそそのヒット曲にはちがいない。ただ、私の中では、かなり印象に強い楽曲で、一時期なぜだかわからないけれど頭の中でいつもこの曲がリフレインし続け、しょっちゅう歌ってもいたような記憶がある。メロディー・ラインに微妙な

隠し味があるのかなあ、とも思ったりするのだけれど、いくら聞き込んでみても「このへんのメロディーにビビッときた」というようなところが見つからない。なのにとっても印象的。いまだ謎の楽曲ではある。

1-4 港のヨーコ・ヨコハマ・ヨコスカ (ダウン・タウン・ブギウギ・バンド)

ダウン・タウン・ブギウギ・バンドの登場は、まちがいなくこの年の音楽界最大級のトピックスのひとつに数えられる。その証拠に、この曲以外にも「カッコマン・ブギ(1-5)」「スモーキン・ブギ(1-9)」と、都合3曲もランクインしているのではないか(選曲者の趣味かもしれないけど)。なにしろツナギの作業服にサングラスといういでたちが、まずわたしたちの度肝を抜いた。今風に表現するなら、チョイワル系とでもいえるだろう。ま、当時のインタビューによれば、単にお金がなかったのでこのスタイルにした、とのことであったが。また、冗談なのか本気なのかわからない、でも耳なじみよくすんなり入り込んでくるそれらの楽曲の数々は、中学生の耳にもじつにかっこよく響いてきたのだった(ちなみにわ

たしは、この当時の楽曲では「売り物ブギ」が一番好き)。「港のヨーコ・ヨコハマ・ヨコスカ」は、はっきり言って音楽的にはさほど見るべきところのない曲だが、その物語性が(すなわち作詞家サイドの力量が)人々に受け入れられた楽曲であり、「アンタ、あの娘のなんなのさ」は流行語にもなった。当然のことながら物まねのネタにもなったし、笑福亭鶴光の大阪弁バージョンにはかなり笑った記憶がある。ダウン・タウン・ブギウギ・バンドの音楽性の高さは、おおむね宇崎竜童氏によるところ大であり、それを裏付けるように、次の年から山口百恵とのコンビでコンポーザー・宇崎竜童の伝説的とも言える快進撃が始まったことは皆様ご承知のとおり。そのあたりについては、また項目も新たにお話するでしょう。

1-5 カッコマン・ブギ (ダウン・タウン・ブギウギ・バンド)

略。

1-6 心のこり (細川たかし)

「心のこり」は、細川たかしのデビュー曲である。この年、レコード大賞新人賞戦線は、細川たかしと岩崎宏美の一騎打ちの様相を呈し、みごと細川たかしが「心のこり」で最優秀新人賞に輝き、涙涙の大団円を迎えたのであった。実力派として定評のある細川たかし。歌のうまさにかけてはデビュー当時から群を抜いているが、どうやら、その実力の根底を支えているのが民謡であるらしい、ということは一般にも知られているところである。実際、細川たかしが突然何の脈略もなく民

謡の一節を歌いあげる姿をテレビで目にしたことのある方も多いのではなかろうか。

話はちょっと横道にそれるが、聞くところによれば、細川たかしは三橋美智也の弟子であったという(ひょっとすると今はもう、三橋美智也って誰?という世代が多いのかなあ...)。わたしがリアルタイムで知っている三橋美智也とは、ジョン・トラボルタ風の服装で「フィーバー!」とか言いながらコマーシャルに出ているオジサン・キャラ(当時、ミッチーと呼ばれていた)である。また、リアルタイムではないけれど「♪夕焼け空

が真っ赤っか」とか「♪ワラにまみれてよー」とかの民謡系歌謡曲を歌っていたらしいということも一応知ってはいた。三橋美智也が民謡界の大御所である、と知ったのはずいぶん後になってからのことだ。かつて一度だけ、ラジオで三橋美智

也の歌う民謡を聞いたことがある。そのときわたしは、あの実力派の細川たかしがなぜこの人に弟子入りしたのか、その理由を理解した。こと民謡に関する限り、三橋美智也は天才だったのである。

1-7 我が良き友よ (かまやつひろし)

最近、かまやつひろしがテレビに登場したときには、必ず「バン・バン・バン」を出演者全員で合唱することになってるみたいだが、たまには

「我が良き友よ」も歌ってほしいなあと思うのはわたしだけだろうか。

1-8 冬の色 (山口百恵)

この年のラインナップにもう1曲、「夏ひらく青春(1-15)」も入っているので、ついでに2曲まとめていってみよう。

山口百恵の芸能史を前期・後期に分けるならば、前期は「陰のある青春歌謡アイドル期」、後期は「大噴火スーパースター期」と分類することができるだろう。「夏ひらく青春」あたりまでが、山口百恵の前期「陰のある青春歌謡アイドル期」にあたる。前期の山口百恵を見る限り、少なくともわたしには、後年彼女がよもやあのような変貌を遂げることになろうとは想像すらできなかった。それはおそらくわたしだけではないと思う。

前期の山口百恵は、ある意味、扱いにくい存在であったかもしれない。ひとつには、彼女の声質がいわゆるアイドル的な声質ではなかったことがある。また、当時としては群を抜くほどに歌のうまい歌手でもなかった。この当時のアイドル歌手の規準といえば、(うまいへたは別として)声は高音域で、ちょっとキャピキャピ感があって、とにもかくにも明るい笑顔で押す、というのが常

套手段だったのだが、山口百恵はそれらすべてに該当していない。それを個性的といえ言えるのだろうけれど、ひとつ上を目指すには、とりわけアイドル系の枠の中で抜け出すには、ビジョンを描きにくいところがあったのではなかろうか。たとえば「夏ひらく青春」を例にとると、曲調はアイドル系ながら、高音の抜けの悪さで違和感があったし、ちょっと無理してる感も漂っていたのである。逆に「冬の色」のような楽曲は当時の山口百恵にはズバリはまった曲ではあったのだが、いかんせん、この曲調でトップを狙うこともまた難しかったわけだ。後期「大噴火スーパースター期」については、76年からの楽曲をもとに詳述するので、ここでは詳しくは述べない。ただひとつ言えることがあるとすれば、彼女の後期の「大ブレイク」は、前期でマイナスとされていたことをすべてプラスに転化した結果であるということだ。もちろんそれは彼女だけの力ではない。この先の考察は、76年のラインナップであらためて。

1-9 スモーキン・ブギ (ダウン・タウン・ブギ・ウギ・バンド)

略。

1-10 『いちご白書』をもう一度 (バンバン)

1975年からほぼ30年が経過した今だからこそわかること、それは、この年のヒット曲ナ

ンバー・ワンがまぎれもなく「『いちご白書』をもう一度」であった、ということである。レコー

ド大賞でもよかったんじゃないのかと、今にして思う。筆者の年代（40～50歳代あたり）にとっては、とりわけ思い出深いこの曲。たぶん、わたしと同年代で多少なりとも「ギターを触った経験あり」のお父さんにひょいとギターを渡して「『いちご白書』をもう一度」を弾いてください、とリクエストしたら、8割以上の方が即座に弾ける気がするがどうだ？。当時、ギターを手にした連中は、ほぼ例外なくこの曲を練習しているはずである。その意味では、この年の代表曲というよりも日本フォーク史を代表する1曲、といったほうが正しいかもしれない。ジャンルとしてはフォ

1-11 私鉄沿線（野口五郎）

なぜだか知らないが、野口五郎といえば「私鉄沿線」と、そういうことになっているらしい。物まねに使われるのもたいていこの曲だし。個人的

1-12 いつか街で会ったなら（中村雅俊）

中村雅俊の曲で何が一番好きかと聞かれたら、ためらうことなく「いつか街で会ったなら」と答えますね、わたしは。歌詞内容も、曲調も（作曲は吉田拓郎）なんとなく中村雅俊の朴訥とした雰囲気によく合っている気がするし、「ふれあい」

1-13 やすらぎ（黒沢年男）

パス1。

1-14 面影（しまぎき由理）

はたして今、これを読んでいらっしゃる方のうち何人くらいが「面影」と聞いて「ああ、あの曲ね、知ってる知ってる」といわれるであろうか。はたまた、「しまぎき由理」と聞いて「ああ、確かあんな顔だったよね」と思い出されるであろうか。テレビドラマ「Gメン75」のテーマソングといえば、思い出された方も多いかもしれないが、

内容はほとんど覚えてないけど、とにかく辛臭いドラマだった印象の強いGメン75（唯一の救いは倉田保明のアクションくらいだった）。そ

うくに分類するほかない「『いちご白書』をもう一度」であるが、不思議と「フォーク・ソングでございませう」といった、ある種の気恥ずかしさのような抵抗感はなく、2006年の現在でも、意外と古さを感じさせないこの曲。そこにわれわれは、作曲者である荒井（現・松任谷）由実の底力を垣間見ることができる。

なお、この曲のタイトルの『いちご白書』とは、映画のタイトルである。コロンビア大学が舞台の、学生運動をテーマにした映画だそうだが、ちなみに、これを観たわが友人の話によると「びっくりするくらい面白くなかった」とのことである。

には「甘い生活」が一番好きなんだけど、賛同される方、手を挙げてください（ちなみに、続・青春歌年鑑には「甘い生活」が収録されております）。

や「俺たちの旅」での気負い的な部分がこの曲では出てきていないと思う。自然体で歌ってる感じがいいですね（もともと、中村雅俊の自然体がどんなんだか、実際には知らないわけだけど・・・）。

んなドラマにぴったりはまったのがこの「面影」であった。たしかエンディングテーマだったと記憶しているが、とにかく暗〜い本編が終わって流れ始める「面影」は、暗〜い気持ちをダメ押ししてくれて、楽しいはずの土曜の夜はなんとなくどんよりと暗くなるのだった。じゃ、見なきゃいいじゃないかと言われそうだが、なんだか見ちゃうんだよなあ、Gメン75。結構視聴率よかったんじゃないのか。ま、ここでどんよりしたおかげで、そのあとの「ウィーク・エンダー」がよりいっそ

う盛り上がるという、そんな効果もあったのかも
しれない。

1-15 夏ひらく青春 (山口百恵)

略。

さて、75年のラインナップ、やっと半分片付きました。では気合いを入れなおして、後半戦、
いきます！

2-1 恋の暴走 (西城秀樹)

申しわけない。この曲、知りません。いや、た
ぶん聞けば「ああ、あの曲か」とわかるんだろう
けど、タイトル見ただけじゃ全然メロディーも浮
かんでできません。西城秀樹に関しては、これから
先、別の曲のところで語ることもたくさんあるの
で、次の登場時に詳しく、ということで、ここは
ひとまずパス2。

2-2 木枯らしの二人 (伊藤咲子)

75年のラインナップとしては、なかなかマ
ニアックな選曲であるかもしれない。この曲を聴
いてまず最初に頭に浮かぶのは (おそらくわれわ
れの年代では)、スター誕生というオーディショ
ンものの草分けとなったテレビ番組のことであ
ろう。「木枯らしの二人」がヒット街道を走って
いたあのころ、スタ誕に出てくるアイドル志望の
女の子たちは、誰も彼もネコもしゃくしも、み
んな「木枯らしの二人」を歌っていた。実際それ
ほどでもなかったのかもしれないが、私の印象と
しては、そんな感じがとても強い。とはいっても、
この曲を選曲してしまう気持ち、確かにわからな
いでもない。いわゆる「サビ出し」という、曲の
中で一番盛り上がるメロディーを頭にどん
ともってくる曲の構成は、一発勝負のオーディシ
ョンにおいて「つかみ」という意味では非常に有
効であったに違いないからである。そこそこの実
力さえあれば、審査員の評価をぐっと一気に高め
ることができただろう。あくまでも実力さえあれ
ば、だが。

1975年 DISC2

- 2-1 恋の暴走(西城秀樹)
- 2-2 木枯らしの二人(伊藤咲子)
- 2-3 学校の先生(坂上二郎)
- 2-4 年下の男の子(キャンディーズ)
- 2-5 裏切りの街角(甲斐バンド)
- 2-6 誘われてフラメンコ(郷ひろみ)
- 2-7 雨だれ(太田裕美)
- 2-8 酒場にて(江利チエミ)
- 2-9 夢よもういちど(真木ひでと)
- 2-10 今はもうだれも(アリス)
- 2-11 みかん色の恋(ずうとるび)
- 2-12 純愛(片平なぎさ)
- 2-13 バンプ天国(フィンガー5)
- 2-14 サボテンの花(チューリップ)
- 2-15 乙女のワルツ(伊藤咲子)

「ひまわり娘」「乙女のワルツ」を代表として、
その歌唱力を前面に押し出した、やや優等生的な
楽曲が多い伊藤咲子だが、その中であって、どち
らかというと俗なイメージのある「木枯らしの二
人」は、かえって耳に新鮮に響いたような気がす
る。

2-3 学校の先生（坂上二郎）

「二郎さん、脳梗塞から奇跡の復帰！」と、先日あるテレビ番組で知った。ま、それはそれとして、「学校の先生」であるが、皆さんこの曲、ご存知ですか。75年を代表する楽曲のうちのひとつ、といえるのかどうかはなはだ心もとない気もするけど。記憶では、歌とセリフの入り混じった、男版「二十四の瞳」みたいな内容の歌だった。これ、ヒットしたのかなあ。でも、なぜか内容ま

で覚えているところを見ると、ヒットしたんだろうなあ。

二郎さんといえば「憧れのハワイ航路（オリジナルは岡晴夫）」。コントの中などで声高らかにこの曲を歌いあげる姿がとりわけ印象深い。わりと最近では、ユニコーンとのコラボレーションなんかもあった（最近でもないか?）。たぶん音楽的な素養はある人なんだろうね、二郎さんって。

2-4 年下の男の子（キャンディーズ）

キャンディーズにとって「年下の男の子」は、ある意味、ターニングポイントになった楽曲である。ひょっとしたら、この曲をキャンディーズのデビュー曲だと思っている人もいるんじゃないだろうか。私の記憶では、伊藤蘭の立ち位置を真中に変え、メインボーカル的に使う戦略に打って出たのが、この曲からだった。

デビュー曲の「あなたに夢中」に始まり、「あぶない土曜日」と、それなりに実力を見せていたキャンディーズではあったが、実力派・アイドルのどっちつかずの状況でもあり、はっきり言って伸び悩んでいた。「年下の男の子」以前の楽曲をみると、田中好子メインで、アイドルではあるけれどそれなりに歌える、それなりにコーラスもできるといった半実力派路線を意識していたから形跡がうかがえるわけである。「年下の男の子」は、間違いなくキャンディーズにとっての勝負曲であった。おそらくこの曲がダメなら、ほとんど普通の女の子（「年下の男の子」以前のキャンデ

ィーズの世間的認識度はそんなもんだっただろう）から、まったく普通の女の子に戻るしかないという崖っぷち、背水の陣、板子一枚下は地獄、みたいな状況だったのではないか。だからこそ、ここでとられた戦略はただ一つ、「アイドル系イメージの定着」だったのである。そのために、「年下の男の子」では、あえてメインボーカルが上手に歌う必要はない、もっと言えば上手に歌わせない、という方向性を打ち出したのだ。

「年下の男の子」以降の作品を見ればわかるとおり、伊藤蘭が必ずしも歌えない歌手であったわけではない。起死回生の策として、うまく聞こえるように歌わせない（ただしコーラスはきちんとかぶせる）という、一か八かの荒業作戦は見事なまでに大当たりしたのであった。いやー、仕掛け人のプロデューサー、誰だか知らないけどなかなかすごい。いずれにしても、ここからあのキャンディーズ伝説がスタートした。その後の展開については、また回を改めて。

2-5 裏切りの街角（甲斐バンド）

この年のラインナップの中で、「想い出まくら」同様、いまだに理由がわからないけれど耳の奥でずーっとリフレインし続けた楽曲のひとつが「裏切りの街角」である。私の中では、この2曲のか

もし出す雰囲気は極めて近い。2曲に共通して呼び起こされるイメージは「雨」。それも梅雨時の雨だ。はっきりした記憶はないが、そんな時期にヒットしていたのかも。

2-6 誘われてフラメンコ（郷ひろみ）

アイドル路線バリバリのころの楽曲。歌詞内容はともかく、曲をととても印象的に記憶しているの

は、言うまでもなく筒美恭平大先生の作品だからであろう。

2-7 雨だれ (太田裕美)

雨だれは、太田裕美のデビュー曲。自らピアノを弾いて歌う姿が印象的だった。太田裕美に関する

論考は、76年の「木綿のハンカチーフ」の項にて詳細に。

2-8 酒場にて (江利チエミ)

そのむかし三人娘と呼ばれていた、とか、そのむかしサザエさんの実写版ドラマでサザエさん役だった、とか、そのむかしテネシーワルツをカバーして一発当てたとか、私が江利チエミについて知っていることは残念ながらそのくらいしかない。しかもこの記憶自体、実体験としての記憶ではなく、「懐かしの〇〇」みたいな番組のVT

Rによるものである。唯一、「酒場にて」だけが、私にとってのリアルタイムで見聞きした江利チエミだ。だからなのかどうか、この曲はとても印象深い。いや、正確に言うと、この時期にちょっとだけ垣間見た江利チエミという人のキャラクターがとにかく強烈であったのかも。

2-9 夢よもういちど (真木ひでと)

グループサウンズ全盛期にはすさまじい人気があったと聞く。「聞く」としか言いようがないのは、世代的にグループサウンズ全盛期と若干のズレがあるためだ。そんなわけで、私の知っている真木ひでとは、演歌歌手としての真木ひでとだけである。ま、知ってるつつても、「雨の東京」

と「夢よもういちど」だけなんだけど…。そもそも真木ひでとって演歌にむいていたんだろうか、と改めて考えてみると、うーん、どうなんだろう、ちょっとしんどかったんじゃないのかなあ。声、ハスキーなんだけど、ねえ…。

2-10 今はもうだれも (アリス)

アリスの存在を世に（といっても限られた世代を中心にではあるけれど）知らしめた最初の曲だったかも知れない。いやー、練習しましたねえ、

この曲。ちゃんとコーラスつけようと思うとわりに難しいんだ。とくに低いほうのパートが。

2-11 みかん色の恋 (ずうとるび)

人気番組「笑点」のちびっこ大喜利で座布団10枚獲得したご褒美に結成された「ずうとるび」。当時、その姿を見ない日はないほど、歌番組、バラエティー番組と抜群の人気を誇り、紅白歌合戦にも出場した。つい最近、何かの番組の企画で再

結成（といっても、山田・江藤・藤井の3人組で、だったけれど）してたので、ご覧になった方もいるだろう。ま、勢いで、というかある意味シャレで結成されたグループだったので、音楽的にはとくに見るべきところなし。

2-12 純愛 (片平なぎさ)

いまやサスペンス劇場の女王と呼ばれる片平なぎさだが、もともとはスター誕生出身。アイト

ルでスタートしたことを皆さんご記憶であろうか。

2-13 バンプ天国 (フィンガー5)

晃の声変わりが秒読みに入り、いよいよ抜本的改革を迫られたフィンガー5。と思い込んでいたが、男性パートの高いところ歌ってるのは三男？。この時点ですでに晃の声変わりは始まっていたのかも(きっとそうだ)。にもかかわらず、ボー

イソプラノに合わせた、聞いているほうが苦しくなってくるようなキー設定。「早いとこ何とかしてやってくれい！」と投書のひとつもしたくなる楽曲に仕上がっている。

2-14 サボテンの花 (チューリップ)

2年前にこのコーナーで論考したとおり、私はチューリップに対して思い入れのない人間である。だから、75年の時点では、「サボテンの花」の存在を知らなかったと思う。それにしてもこの

曲、ソロ・バージョンとかリメイク・バージョンとかソロのリメイク・バージョンとか、やけに使いまわされてないか。ま、いい曲だからいいんだけどね。

2-15 乙女のワルツ (伊藤咲子)

略。

というわけで、75年のラインナップ30曲総当たり戦が終了した。当初の予定では、今回少なくとも2年分(75年、76年)を片付けるつもりであったが、30曲やっただけで、すでにヨレヨレだ。それよりなにより、この後さらに30曲を片付けるだけのスペースもなくなった。まことに不本意ながら今回の大講釈は1年分を料理しただけでお開きとさせていただきたい。次回もこのパターンで原稿を進めた場合、70年代を終えるまでにヘタすると4年必要になってしまう。やっぱ、総当たり戦方式は無謀だったのだろうか。どうしようかな、来年から。ま、一年考えてみますわ。なかなか総括の難しい75年のラインナップ。あえて傾向を見出すなら、テレビ番組の絡んだヒット曲が多い、ということだろうか。スタ誕出身歌手の勢力拡大、ドラマ劇中歌の躍進が注目される。異色だが、笑点から出てきたずうとるびも、テレビ絡みといえばテレビ絡みだ。

以上を踏まえて、75年ラインナップからセレクトした超個人的ベストヒットは次のとおり。

○思い出まくら(小坂恭子)

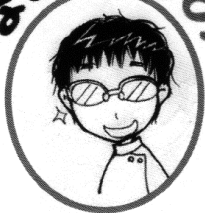
○『いちご白書』をもう一度(バンバン)

○いつか街で会ったなら(中村雅俊)

70年代超個人的ベスト20/40

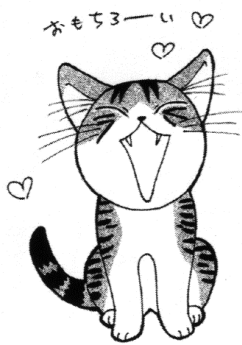
- 手紙(由紀さおり)
- 白い色は恋人の色(ベッツィ&クリス)
- もう恋なのか(にしきのあきら)
- 17才(南沙織)
- また逢う日まで(尾崎記世彦)
- 花嫁はしだのりひことクライマックス
- あの素晴らしい愛をもう一度(加藤和彦と北山修)
- 水色の恋い(天知真理)
- 喝采(ちあきなおみ)
- 結婚しようよ(よしだたくろう)
- 虹と雪のバラード(トワ・エ・モア)
- 心の旅(チューリップ)
- 個人授業(ファンガーファイブ)
- 街の灯り(堺正章)
- 積木の部屋(布施明)
- よろしく哀愁(郷ひろみ)
- 岬めぐり(山本コータロー)
- 思い出まくら(小坂恭子)
- 『いちご白書』をもう一度(バンバン)
- いつか街で会ったなら(中村雅俊)

ほみつちの



マンガ日和

心ときめく、心に染み入る、
そんなマンガがきっとある！



チーズ スイートホーム

こなみなた 講談社

一匹の迷い子猫と
その家族のほのぼのした生活が
描かれたお話です。

どのページをめくっても
とにかくかわいいです！

1~2巻 以下続刊



本日のマンガ。 第一回

夕風の街 桜の国

ここの史代 双葉社

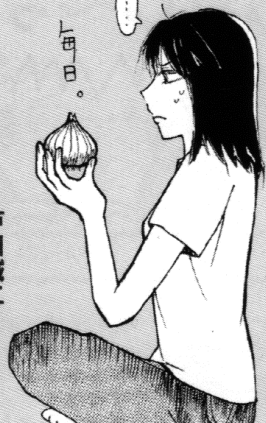
昭和三十年から平成十六年
までの広島が、ある家族を
軸に描かれています。

登場人物のしぐさ一つ、
言葉一つが心に刺さります。

生きるススメ

戸田誠二
宙出版

やさやかな日常が描かれている
ショートショートが
たくさん詰まっています。
きつと心に響く作品があるはずですよ。



編集後記

今回ついに、創刊以来、長年貫いてきた本会報の禁を破ってしまった。まあ正確に言えば、前号でもちよつとだけやってはいるのだが、読者のみなさまお気づきだろうか。

「本会報では、写真は使わない」、そして「必要な場合には、写真をイラストに起こして掲載する」、これが創刊からかたくなに守ってきた本会報のオキテである。ついにオキテは破られた。しかも表紙から。

これにはいくつか事情があるが、まずは写真をデジタルデータとして簡単に扱えるようになったことが大きい。パソコン上で編集する限りにおいては、写真もイラストも、扱いは同じなのである。

また、画像処理ソフトの進化も理由のひとつにあげられるであろう。最近の画像処理ソフトはホントによくできている。写真をイラストに起こして画像処理ソフトで写真のように加工していくと、ほとんど写真と同じようなものができあがってしまうのだ。これでは、写真をイラストにする意味がない。

そんなわけで、今回から写真解禁である。楽しい写真、感動的な写真、美しい写真からちよつとヤバイ写真（掲載するかどうかかわかりませんが、受け取る用意はあります）まで、どんどんお寄せいただきたいと思う。

(編集長)

発行・岡山細胞検査士会

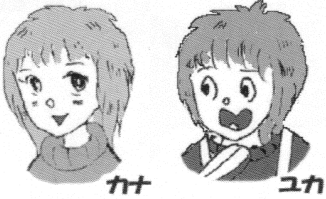
発行日・平成十八年三月三十一日

娘の門出を見守る母の心境やいかに!? 連載・第13弾!

Twins

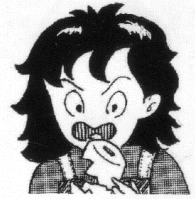
wai wai

Land



カナ

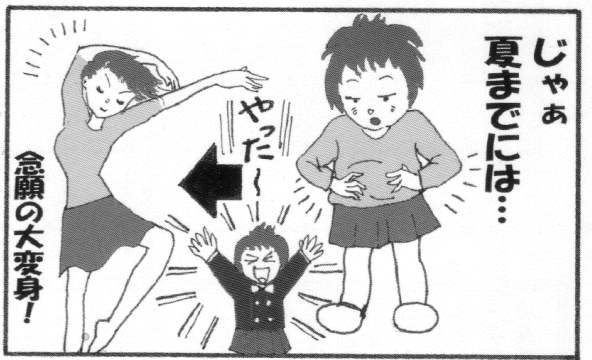
ユカ



作・小原明子

●明るい明日が待っている

●すばらしい運勢



●別れ...そして旅立ち。今まで、オーっと同じ道を行ってきた双子たちにも、とうとう別々の道を進む日が訪れました。相手を鏡にしていた今までの世界に別れを告げ、新しい自分発見の旅に出発です。さて、一年後の二人は、いったいどんなふうに変化しているのでしょうか。